

古代ギリシアにおける教養・教育の理念に関する研究 (10)

—W. イェーガーの『パイデア』に学ぶ—

A Study on the Ideal of Culture in Ancient Greece (10): Learning from Werner Jaeger's *PAIDEIA*

畑 潤

Jun HATA

I. 本研究の課題と構成について

1. 本研究の経緯と小論の対象について

本研究は、ドイツの古代学者である W. イェーガー (1886～1961) の著書『パイデア—ギリシア的人間の人格形成—』(*PAIDEIA DIE FORMUNG DES GRIECHISCHEN MENSCHEN*) の G. ハイエットによる英訳版『パイデア—ギリシア的教養の理念—』(*Paideia: The Ideals of Greek Culture*) から学ぶことを主題とする継続研究の一環で、その継続研究 (7) (都留文科大学大学院紀要第 21 集、2017 年 3 月) に直接連続する。具体的には、『パイデア』第 II 巻 (第 3 編) の「2 The Memory of Socrates ソークラテースの思い出」の (第 2 節) 「SOCRATES THE TEACHER 教師としてのソークラテース」の中間部を対象とする。

2. 小論の構成について

小論 II. では、第 2 節 (小論における B) に項を設定して、その項ごとに〈注記と考察〉として私の注記的なものと簡略な考察事項とを付す。訳文の項の区切りは、ドイツ語版にはない、英訳版で設定された 1 行空けの区切りを使っている。ただしその項の見出しは私が便宜的に付したものである。また第 2 節 (=B) の小論での末尾に「NOTES」(「ANMERKUNGEN」) を「原文注記」として配し、続いてそれに対する〈注記と考察〉を記す。

なお小論の末尾に、III. 「現代日本の教育研究における古代ギリシア思想の理解：考察ノート④～継続研究 (10) における～」を置く。

3. テキストと論述の仕方

イ) テキストは第 II 巻 (1944 年版) を用いる。本継続研究が複数回にわたるので、英訳版の該当ページを記入することにするが、それは 1944 年版のものである。なお和訳に際し、ごく一部でドイツ語版を生かした箇所がある。ドイツ語版の参照は、一卷

にまとめられた復刻版 (1989年、初版は1973年) を用いている。

ロ) キータームなどは、小論の趣旨に関係してくるので、適宜ドイツ語を挿入し (格変化などは原文中のまま扱っている)、その訳を付すようにした。ギリシア語、ラテン語の引用文に関しては、私の素養の不足からくる誤りを避けるために、また文意は前後によって類推できるので、訳出しないでおいた箇所がある。文章中の参照事項の多くは、訳すことなくそのまま記してある。

なお、〈注記と考察〉などでギリシア古典からの訳文を引用する際に、そのなかの訳語を確認するためにギリシア語、英語を挿入する場合がある。それらは、とくに注記しない場合は、すべてローブクラシカルライブラリーに拠っている。

ハ) カッコなどの表記は、これまでの継続研究の仕方に準じる。

ニ) 〈注記と考察〉における人名等の確認に参照した文献は、本継続研究 (5) と同様である。

II. 「ソクラテースの思い出」 (英訳版第Ⅱ巻第3編の2 The Memory of Socrates)

英訳版第Ⅱ巻、1944年版：29p~57p

B. 教師としてのソクラテース

(SOCRATES THE TEACHER, Sokrates als Erzieher)

(本継続研究 (7) からの続き)

2. ソクラテースは「自然哲学」に批判的態度をとり、「自然科学 (医学)」の方法に共鳴した 〈訳文〉 29p ~ 33p

ソクラテースは、アテーナイに最初の哲学者たちと最初の哲学的な活動 (activities, Studien 研究) が現われた時代に成長した。彼のアルケラーオス⁽¹⁾との関係についての言い伝えを無しにしても、われわれは、エウリーピデース⁽²⁾とペリクレーズ⁽³⁾の同時代者の一人として、彼はアナクサゴラス⁽⁴⁾やアッポローニアのディオゲネース⁽⁵⁾といった自然哲学との早い出会いをもったと考えなければならないだろう。われわれは、彼がプラトンの『パイドン』で話している彼自身の展開の説明が歴史的に正確だということ⁽⁶⁾——少なくとも彼が初期にアナクサゴラスの自然学 (the physics 物理学) に興味を抱いたことを話している場面の説明——を疑う必要はない。(たしかに：zwar) プラトンの『弁明』では、彼は、その分野のいかなる専門的な知識ももっていないと、明白に否定している；⁽⁶⁾⁽⁷⁾しかし、すべての教養あるアテーナイ人のように、彼はアナクサゴラスの著書を読んでいたのであり、それは(彼が同じ部分で言っているように)、劇場のオルケストラ (the orchestra) の本屋から一ドラクマで買うことができたのである。⁽⁷⁾⁽⁸⁾クセノポーンは、彼 (=ソクラテース) は後においてすらいつもの‘古い賢人たち’——すなわち詩人や哲学者たち——の著作を、そこから重要な文章を引き出すために、自分の家で若い友人たちと詳細に検討していた、と伝えている。⁽⁸⁾⁽⁹⁾そういうわけで、アリストパネースは、彼 (=アリストパネース, der aristophanischen Komödie アリストパネースの喜劇) が、ソクラテースはディオゲネースの宇宙を創造する (creating the

cosmos, kosmogonischen 宇宙進化論の) 渦巻きやすべての存在するものの根本原理 (the basic principle of all existence, das Urprinzip 根源的原理) である空気に関する自然哲学理論を詳述している、と評するかぎりには、恐らくはたいいていの人が考えているほどに真実から遠いわけではない。しかし、彼 (= ソクラテース) がどれくらいこれらの自然科学 (scientific, der Naturphilosophen 自然哲学) 学説を自分自身の思想に組み入れたのか?

『パイドーン』で彼は、アナクサゴラスの書物を手にしたときに重大なことを期待した、と述べている。⁽⁹⁾ある人がそれを彼に与えていたのであり、そして (たぶん: wohl) 彼に、彼が探し求めているものをそこに見出すことを期待する気にさせていたのであった。そのことは、すでにあらかじめ、彼は自然科学者の (the physicists', der Physiker 物理学者たちの) 宇宙についての自然科学的な説明 (scientific explanations of the universe, der Naturerkklärung 自然の説明) について懐疑の念をもっていたことを意味している。アナクサゴラスもまた、その書物の始まりは彼の期待を駆り立てたのではあったが、彼を失望させたのであった。そこではアナクサゴラスは、知性 (Mind, dem Geist) が宇宙を造り上げている原理であるという意味のことを言っている; しかし書物が進むと彼はそれ以上にはこの説明を使わず、他のすべての自然科学者たちのように、いっさいを機械的な (mechanical, materielle 物質的な) 原因に帰している。ソクラテースは、彼 (= アナクサゴラス) が、どのようにして物事が生じるかを説明し、それらが 'それが最善だから' という仕方で生じることを示してくれるものと、期待していた。すなわち彼は、自然の習わし (the rule, das Walten 働き) は有益な目的に向けられているに違いない、と考えた。『パイドーン』における説明によれば、ソクラテースはこの自然哲学の批判から進んでイデアーの学説に達した; しかもなお、アリストテレスの非常に説得力のある言明によれば、イデアー学説は少しも実在するソクラテースの作とすることはできない。疑いもなくプラトーンは、自分がソクラテースにイデアーがあらゆる現象の第一原理 (the ultimate causes of all phenomena, Zweckursache 目的因) であるという学説を説明させることは、正当化されると考えたのであって、なぜなら彼自身は、ソクラテースのあらゆることがらに存在する善という本質 (the nature of the Good, dem Guten (αγαθον)) の探究を通じて、徐々に (gradually, gradlinig まっすぐに) それ (= イデアーの学説) に達してきていたのであるから。

ソクラテースもまた自分の問いに対する答えを見出すために自然を探究した。クセノポーンの『ソクラテースの思い出』で、彼は、宇宙の組み立て (the structure, der Einrichtung しつらえ) を治める目的 (the purpose, die Zweckmäßigkeit 合目的性) について語らい、世界における建設的で精神的な原理の存在を証明するために、自然における善なるもの、目的をもつものの全て (all, den Spuren 痕跡・手がかり) を見出そうとする。⁽¹⁰⁾彼が人間身体の器官の技術的な完全性について (この対話で: in diesen Gesprächen) 述べていることは、アッポローニアのディオゲネース⁽¹¹⁾の自然哲学の著作に由来しているように思われる。⁽¹²⁾ソクラテースが、彼 (= 自分) が挙げている個々の証拠が独創的なものであると主張することはまずないだろう: だからそのことは、われわれがこの会話が本質的には歴史的に本物である (historically genuine, historisch 歴史的なもの) と考えることへの反対理由にはならない。もしそれが借りものを含んでいたら、それらはいかにもソクラテースの考察方法らしい。ディオゲネースの著

作に彼は、彼がプラトンの『パイドーン』において自分が探し求めていると述べていることを⁽⁴³⁾——つまり、自然における無数の個々の現象に(も：auch)適用されるアナクサゴラスの原理を——見出した。⁽¹³⁾ それでもなお、この会話は彼を自然哲学者というものにしていない：それは、彼が宇宙論に接近していく観点を示しているだけである。ギリシア人にとって(いつも：stets)、彼が人間生活(human life)における秩序の基礎と考える原理を宇宙に(も：auch)見出そうとし、それを宇宙から導き出そうとすることは、当然なことであった。われわれはそのことをすでに何度か指摘してきたが、今やそのことがもう一度、ソクラテースの場合で証明されるのを見いだす。⁽⁴⁴⁾ このように彼が自然哲学者たちを批判していることは、彼の関心が、そのまさに最初から、倫理性と宗教心の問題に向けられていたということを間接的に証明する。実際彼の人生には、自然哲学に専念している時代はなかったのであり、というのは、科学は、彼の心の奥に在る問い、そして(彼にとっては：für ihn)他のすべてのことが依拠している問い、に答えられなかったのである。それゆえに、彼はそれをそのままにしておいた(彼はさしあたりそれに言及しないでおくことができた：konnte er sie beiseite lassen)。⁽¹⁴⁾ 彼がいつも自らの目標に向かって行動するときの確かな率直さ(the unerring directness, die unbeirrbar Sicherheit 動じることのない確信)は、彼の偉大さの兆候である。

彼の自然哲学への関心の無さは、プラトーン、アリストテレスによって、また他のおおくの人によって、今日までしばしば強調されてきている。しかしその事実には、容易く見落とされる別の面がある。クセノポンによる、彼(=ソクラテース)の宇宙の目的を突き止める試みの叙述は、彼の自然への接近法が初期の自然科学者たちによって探究されたものまさに逆であることを示している。それは、人間中心的(anthropocentric, anthropozentrisch)であった。彼の推論はすべて、人間と人間の身体構造で始まった。もし彼が引証している事実がほんとうにディオゲネースの著作から借用されたものであったなら、それならば、そのことはその論点を確証することを助ける——というのは、ディオゲネースは単に自然哲学者であっただけではなく、著名な医者でもあったのである；そしてそれ故に彼の学説においては(たとえばエンペドクレス⁽¹⁵⁾のような、何人かの後の自然科学者たち(physicist, Naturphilosophen 自然哲学者たち)の学説おけるように)、人間の生理学(human physiology, die Physiologie des Menschen)は、古い、ソクラテース以前のどんな自然学説においてよりも、はるかに重要な位置を占めたのである。これはソクラテースの関心を必ず刺激し、彼に新しい問題を示唆したはずである。そして今やわれわれは、彼は、彼の当時の自然科学(natural science, „Naturwissenschaft“)に対する明らかに否定的な態度だけではなく、しばしば見落とされる肯定的な態度をもっていた、ということを理解することができる。われわれは、自然科学(natural science,)は当時、われわれがふつうその全分野を包含していると考えられている宇宙論(cosmology, die Kosmologie)と‘気象学 meteorology’(Meteorologie)だけではなく、ちょうど同時に、次巻で叙述される⁽¹⁶⁾、(理論的にも実践的にも)大きな展開に入っていた医療技術(the art of medicine, die ärzliche Kunst)も含んでいたということを忘れるべきではない。同時代の著作『古来の医術について』の著者のような医者でさえ、医学(medical science, die ärzliche Kunst)を、実際の経験と精密な認識(knowledge, Beobachtung 観察)にもとづく自然科学(natural science, der Naturerkenntnis 自然認識)の

唯一の (*only*) (*bisher einziger* これまでの唯一の) 分野だと考えていた。彼は、自然哲学者たち (*the natural philosophers, die Naturphilosophen*) とその仮説は、自分に何も教えられず、むしろ (*but*) 自分からかなりのことを学んできている、と考えた。⁽¹⁷⁾《45》この人間中心的な姿勢 (*attitude, Wendung* 転回) は、後期アッティケー悲劇とソフィストたちの時代の (全く共通する: *ganz allgemein*) 特徴であった。それは——ヘーロドトス⁽¹⁸⁾ とトゥーキュディデース⁽¹⁹⁾ が現われているように——医術の、自然哲学者たちの宇宙論的仮説 (*the cosmological hypotheses, den Welthypothesen*) からの解放において明示された、経験主義的な接近方法に結びついていた。

医学は、そういうわけで、ソクラテースの宇宙論者の空想的 (*high-flown, hochfliegenden* 高邁な) 思索に対する拒絶にもっとも顕著に類似しているものである。それ (= 医学) は、人間生活 (*human life, des menschlichen Lebens*) の事実 (*facts*) を吟味しようとする、まったく同様の理にかなった決意を見せている。⁽⁴⁶⁾ その (= 医学の) ように、ソクラテースは、人間の自然 (*human nature, der Natur des Menschen*) は、われわれにもっともよく知られている世界の一部であり、彼の実在の分析にとっての、またそれを理解する手がかりとしてのもっとも堅固な基礎である、ということを見出した。キケローが言うように、彼は哲学を天上から引き下ろし人間の都市と住まいに招き入れたのである。⁽⁴⁷⁾ そのことは、われわれが今見てきたように、彼がその関心とその研究対象を変えたというだけではなく、彼がより厳密な知識 (*knowledge, des Wissens*) の概念 (もし知識といったようなものがそもそもあるとすれば) を考え出したということも意味する。古い哲学者たちが知識 (*knowlege, Erkenntnis*) と称してきたものは、実際には宇宙に関する哲学的仮説のことであった——それは、ソクラテースにとっては、頂上を雲につつまれた幻想、壮麗なたわごとを意味している。⁽⁴⁸⁾ 彼が、彼にとって到達不能のその高遠な知恵 (*wisdom, Weisheit*) に対し敬意を表明するときはいつも、彼は反語的に語っている。⁽⁴⁹⁾ 彼自身は (アリストテレスが正しく観察しているように) いつも帰納法で前進した;⁽⁵⁰⁾ つまり彼の方法は、医術における事実在即する経験主義者のそれと同種である。彼の知識の理想 (*ideal of knowledge, Wissensideal*) は *τέχνη* (技術) であったが、それは治療の技術 (*the art of healing, die Heilkunst* 医術) において、とくにそれ (= 治療の技術) が実践的な目的を念頭にもっていたから、典型的に体现されていた。⁽⁵¹⁾ あの頃は、厳密な科学のようなものは存在していなかった。その当時の自然哲学は不正確なもののすべてであった。それゆえ、哲学の経験主義も存在しなかった。古代社会においては、経験が実在についてのあらゆる正確な知識の基礎であるとする主義は、医術に拠って、そして医術に拠ってのみ、主張された。そういうわけで、医学が知的世界において、今日よりもより高い、より哲学的な地位を保持したのである。同様に、その考えをわれわれの時代の哲学に伝えたのも医学であった。現代の哲学の経験主義は、ギリシア哲学のではなく、ギリシア医学の所産である。

もしわれわれがソクラテースの古代哲学上の位置と彼の人間中心的な態度 (*his anthropocentric attitude, seine anthropozentrische Wendung* 人間中心的な向き換え) を理解しようとするならば、われわれは、彼の時代のもっとも偉大な知的影響力の一つであった医学に対する彼の顧慮を、いつも思い起こさなければならない。彼の医学的事例の活用は

著しく頻繁である。しかも彼はそれらを行き当たりばったりで使ってはいない：彼はそれらを、それらが彼の思考様式に合致しているから使った；実際それらは、彼の自身の人格の考え方 (his view of his own personality, dem Selbstbewußtsein 自意識)、彼の倫理感、彼の全人生に合っていた。彼は実に医者であった。クセノポーンは、彼は自分の友人の身体的な健康のことを、精神的な幸福 (welfare, Wohlergehen 健康・幸福) とまったく同じ程度に気遣ったとまで言っている。⁽²⁰⁾ ⁽⁵²⁾しかし彼は、なかならず魂 (the soul, des inneren Menschen 内面的人間) の医者であった。彼が、彼の宇宙は目的をもつという証明において、身体構造 (the physical structure of man, die körperliche Natur des Menschen 人間の身体的自然) について考察する方法は、明白に、彼の目的論が彼の経験的な、準医学的な見地に密接に関係している、ということを示している。それ (= 彼の目的論) は広く知られていた人間と自然の目的論的な考え方との関連においてのみ理解され得るのであり、それ (= 目的論的な考え方) は、初めて医学において公に認められるようになり、そのとき以来、アリストテレスの宇宙の生物学的観方に最終的な哲学的表現を見出すまで、ますます明確になっていったのである。ソークラテースの善 (the Good, des Guten) の本性の探究は、もちろん、まったく彼自身の、他の誰からも学んだのではない、関心事の現れであった。彼の時代のまじめな (earnest, zünftigen 本職の) 自然哲学者というものは、それを、単に素人愛好家 (dilettante, Dilettant) の問い (the enquiry, die Frage) であって、その問いには理論物理学者の (the pure physicist's, des Forschers 学者の) 大胆な無神論 (scepticism, Skepsis 懐疑) は答えを見い出すことはできない、と思ったに違いない。しかしその素人愛好家の問いは独創的なものであった；そして、‘ヒッポクラテース’やディオゲネースの医学書と照らし合わせて、それ (= その素人愛好家の問い) があの全時代のもっとも意味深い疑問 (doubts, Suchen) を的確に述べていたということを理解することは、われわれにとって重要なことである。

<注記と考察>

- (1) アルケラーオス：前5世紀中頃の人。イオーニアー学派のギリシアの哲学者で、アナクサゴラスの弟子であり、「自然哲学をイオーニアーからアテーナイにもたらしたとされる。(松原著) 本継続研究(7) II. B. 1. の<注記と考察>(7)を参照。
- (2) エウリーピデース：前485/480年頃～前406年頃。アッティケーの三大悲劇詩人で、「優れた教育を受けアナクサゴラスやソフィストのプロータゴラス、プロディコス、ソークラテースらに師事あるいは親炙し、彼らの新しい思想から甚大な影響を蒙った。」という。エウリーピデースの名の下に19編の作品が現存し、そのほか、「莫大な数の断片」が残っているという。彼は、「新時代の合理主義と人間中心の立場から旧来の神話伝説を自由大胆に改変し、神々や英雄 heros をも現実の人間のように写実的に描出。弁論術を巧みに駆使し、特に情念や愛慾にとらわれた女性の心理を鋭く分析したことで知られる。」という。とくにその死後に「人気は圧倒的に高まり、ヘレニズム・ローマ時代を通して最も有名な悲劇詩人となった。その作品は全ギリシア文明世界において繰り返し上演され、教科書にまで採用されて読み継がれ、後世ヨーロッパ文学にも少なからぬ影響を及ぼした。」とされる。(松原著)
- (3) ペリクレース：前495年頃～前429年。古代アテーナイの最大の政治家で、「音楽家

でソフィストのダモン Damon, Δάμωνをはじめ、哲学者エレアーのゼーノーンやアナクサゴラスらから教育を受け、とりわけアナクサゴラスを通して雄弁と高邁な精神を学んだ。」という。また「30年にわたる彼の治下(前461～前429)、アテナイは全盛期を迎え、ソポクレースやソークラテース、ヘーロドトス、ヒッポクラテース、デーモクリトス等々といった錚錚たる人物が陸続と排出・活躍し、「全ギリシアの模範」と称されて、その黄金時代を謳歌したことは特筆に値する。」とされる。(松原著) なお、ペリクレスについては本継続研究(4)Ⅱ. 1. の〈注記と考察〉(2)、またペリクレスとソークラテースとの時代関係については本継続研究(7)Ⅱ. B. 1. の〈注記と考察〉(3)を参照のこと。

- (4) アナクサゴラス：前500年頃～前428年頃。イオーニア出身の自然哲学者で、アテナイに移住し、「イオーニアの自然哲学(ミーレートス学派)を初めてアテナイに導入」したという。(松原著) 本継続研究(6)のⅡ. 3. (9に番号変更) 〈注記と考察〉(5)を参照のこと。
- (5) (アッポローニアの) ディオゲネース：前499年頃～前428年頃。折衷主義の自然哲学者で、「アテナイに住み、青年時代のソークラテースの師の一人であったと考えられる。」という。(松原著) ディオゲネースについては、本継続研究(6)の原文注記の〈注記と考察〉(2)を参照のこと。
- (5) イェーガーが《原文注記》36. で指示している対話篇『パイドーン』の箇所は、ソークラテースがケベースに向かって、「ぼくはね、ケベース、若いころ、自然の研究とよばれるあの知識を求めることに、それはもう、たいへん熱中したことがあった。何とすばらしい知識だろうと、ぼくには思えたのだ——ひとつひとつのものの原因を知り、それぞれのものが何によって生じ、何によって滅び、何によって存在するかを究めるといふこと！ぼくは、最初次のような問題を考えながら、自分の考えを何べんも、ああでもない、こうでもないといひくりかえしたものだ。たとえば——」(藤沢令夫訳、『プラトン 世界文学大系3』筑摩書房、1959年、所収)と語り始めていく場面のことである。プラトンの諸対話篇のなかでも格別に感銘深い下りである。イェーガーの指示する箇所の最初の方の一部分であるが、本継続研究(8)の《原文注記》の〈注記と考察〉(2)で引いておいた。
- (6) イェーガーが指示している箇所(『弁明』)では、ソークラテースは告発者たちの訴状の一部を読みあげ、続いて次のように述べている。

「…実際それは諸君自身もアリストファネスの喜劇において親しく見聞せられたに違いない。そこではソクラテースなる男が舞台を歩き廻って、あるいは空中を飛行し得ると自称し、あるいは、多くといわず少くといわず徹頭徹尾私の理解せざる事物について外にも多くの妄語を弄するのである。もとより私がこういうのは、仮にこの種の事象に通曉せる人がありとすれば、そういう知識を軽蔑するためではない。私はただメレトスからかくも重き罪状に問われることを心外とするのである。アテナイ人諸君、この種のことは私の全然関知しないところである。…」(久保勉訳、岩波文庫、1927年第1刷、1964年第23刷改版発行)

- (7) イェーガーが指示している箇所(『弁明』)は、ソークラテースの、メレトスに対する、次のような論駁の部分である。

「親愛なるメレトス君、君はアナキサゴラスを訴えるつもりなのか。君はこの人達を馬鹿にしきって、彼らはクラゾメノス人アナキサゴラスの著作がこの種の説で充たされていることを知らないほど無学だと思っていられるのか。するとまた青年が私から学ぶといわれているところの智識というのはオルケストラへ行って高タードラクメも出せば時折買うことの出来るもので、従ってソクラテスがそれはわが物であるらしい顔をするならば——ましてそれはきわめて奇妙な説なのだから——彼を嘲笑する種とすることが出来るようなものなのか。では、ゼウスにかけて、君は本当に、私がそれほどに全然神々の存在を信じないと思われるのか。」
(久保訳)

- (8) イェーガーが指示している箇所 (『言行録』) は、ソクラテスがアンティフォーンに答える下記のような内容である。

「…そしてまた私も、アンティフォーン、人が良い馬や良い犬や鳥を愛好するのと、おなじように、あるいはそれにもまして、良友を愛好し、そして自分が何かよいことを知って居ればこれを伝授し、また彼らが美德に進む助けになると思われる人々にも推薦して、その友達とならせる。そして古えの賢人たちが書卷に書きのこしてくれた宝は、これをひもといて友人たちとともに閲読し、もし何か良いことを見つければわれわれはこれを抜粋し、そして互いに裨益し合うことができるのを、無上の得と考えるのである。」(佐々木理訳、岩波文庫、1953年、1974年改版)

- (9) イェーガーが指示している箇所 (『パイドーン』) は、上記(5)に連続するソクラテスの長い語りの部分で、参考のためにその一部分を下に抜粋しておく (藤沢訳)。

「ところでそのころ、あるときある人がアナクサゴラスの書物——という話だったが——の中から、万物を秩序づけ、万物の原因となるのは知性(ヌゥス)であるという意味の言葉を、ぼくに読んで聞かせてくれた。聞いてぼくは、この『原因』に快哉を叫んだ。知性をすべての原因とすることは、やり方さえ正しければ、立派な考えであるようにぼくには思えたのだ。そしてこんなふうに考えた——もしこれがほんとうなら、いやしくも秩序をあたえるのが知性である以上は、知性はあらゆるものを、全体としても個々のものとしても、まさにこうあるのが最善という仕方で秩序づけ、ところをあたえるだろう。(…中略…) この考え方で行くと、人間が本来考察しなければならないことはただひとつ、人間自身を問題にする場合でも、ほかの何を問題にする場合でも、そもそも何が最上であり最善であるかということだけとなる。(…中略…)

このように考えながら、ぼくは、事物の原因をぼくの意にかなったやり方で教えてくれるひとりの師を、このアナクサゴラスに見いだしたと思って、心をおどらせたわけだ。(…中略…) こう思ってぼくは、この期待を千金にもかえがたいものに評価した。ぼくは性急にその書物を手にとり、できるだけ早さで読んで行った。できるだけ早く、何が最善であり悪であるかを知るために……

「期待はまことに大きかったが、友よ、みるみるうちにそれはぼくから去って行った。(…以下略…)

- (10) イェーガーは原文注記で、クセノポーン『言行録』1.4と4.3を指示している。その1.4では、ソクラテスはアリストデーモスとの対話で、「それでは、はじめて人間を

創り出した者が人間に五官を備えてくれたのは、何か役に立てるためであったと君は思わないかね。眼に写る物を見るように眼を与え、耳に入る物を聞くように耳を与えてないか。また匂いは…」と多くの例を挙げて、それぞれが目的の産物であることを示し、さらに「靈魂」の性質へと説明を進めていく。その一部ということで、下記に引いておく。(佐々木訳)

「ところで、神は単に肉体の心配をすることのみで足りりとなさらず、これがもっとも大切なことであるが、さらにもっとも優秀な靈魂を人間に植えつけてくれたのである。まず第一に、他のいかなる生き物の魂が、この宏大にして壮麗な万象を造営した神々の存在を、知ることがあるか。人間よりほかに、いかなる種族が神々を祀るか。そしていかなる魂が、人間の魂以上に、飢えや渇きや、寒さや暑さに対する用意をしたり、病気を癒したり、体力を鍛えたり、知識の獲得に努力したり、あるいは聞いたり見たり学んだりしたことを正しく記憶したりすることが、できるか。ほかの生き物とくらべて人間は神々のごとく生活し、その生まれつきにおいて身体も魂もはるかに卓越していることが、君には一目瞭然でないのか。…」「善き友よ、君の心は君の身体の中であって、これを思うがままに左右することを、よく理解したまえ。そしてまた万有の中に住する理性も、神羅万象を己れの好むがままに処理すると思わなくてはいけない。また君の眼が幾数町の先に届くことができるのに、神の眼が万有を一時に眺めることが不可能であると、思ってはならぬ。君の魂がわが国のことも、エジプトのことも、シチリアのことも考えることができるのに、神の叡智が万有を一時に思念する能力なしと、思ってはならない。実に君が人のためにつくして見て、尽された深切を返さんとする者がわかり、恩義をほどこして見て、恩義にむくいようとする者を知り、智慧を借りようとして、はじめて智慧の人を悟るように、神々にも仕えて見てはじめて、はたして神々が人智には知れぬ事柄について君に論えてくれようとなさるかどうかをためせるのであり、そして一時に一切を眺め、一切を聞き、一切所に在って、一時に一切を留意したまう偉大と円満自在とを、君は悟るであろう。」

また4.3では、ソクラテースはエウテュデーモスとの対話で、「言っでごらん、エウテュデーモス、君はいままで、神々がどれほど心を用いて人間の必要とするものをととのえてくださってあるか、考えて見ようと思ったことがあるかね。」と問いかけ、「光」「休息」「太陽」「月」「食物」「水」等などの人間にとっての効用を説明していく。そうして「神々の業」と「人間の靈魂」の説明に入っていく。その一部ということで、下記に引いておく。(佐々木訳)

「…まして神羅万象を整然と統一して維持する神、そこには一切の美なるもの善なるものが存し、これらをいかに人々が使用すると永遠に不損、無染、不老の状態で供給しつづけ、思いよりも速やかに過つことなく奉仕せしむる神は、その偉大な業をなさるのは見えるけれども、これを経営している姿はわれわれに見えぬのである。」「ことに人間の靈魂、人間に属するものうちで何ものよりも神の性質を帯びているものである靈魂は、われわれに君臨していることは明らかであるのに、その本体は見えない。これらのことをよく心にとめて、われわれは眼に見えぬものを軽んずることなく、もろもろの現象の中に神々の力を認識して、心

霊をうやまわなくてはならぬのである。」

(11) アッポローニアのディオゲネース：前499年頃～428年頃。折衷主義の自然哲学者で、「『ソクラテース以前の哲学者』のうち最後の人と見なされている。」という。(松原著)本継続研究(6)の原文注記の<注記と考察>(2)を参照のこと。

(12) イェーガーは原文注記で、クセノポーン『言行録』1.4.5f.を指示している。上記(10)を参照のこと。

(13) イェーガーが原文注記で指示しているのは、『パイドーン』の中の、ソクラテースが、アナクサゴラスの著書に出会ったときの期待が失望へと変っていったことを語っている箇所である。参考のために下に引いておく(藤沢訳)。

「…彼はきっと、個々の事象の原因と、万物に共通の原因とをそれぞれに割りあててにあたって、個々のものにとって最善なものと、万物に共通して最善なものとを説明することだろう。こう思ってぼくは、この期待を千金にもかえがたいものに評価した。ぼくは性急にその書物を手にとり、できるだけ早く、何が最善であり悪であるかを知るために……

「期待はまことに大きかったが、友よ、みるみるうちにそれはぼくから去っていった。ほかでもない、読みすすんで行くうちに、ぼくがこの書物のなかに見つけたのはどんな男だったか——彼は『知性』というものをすこしも使っていなかったし、もろもろの事物に秩序をあたえるための何らの原因も、知性に帰してはいなかった。そして、空気とか、アイテールとか、水とか、その他いろいろとたくさんの妙なものが、原因だとされているのだった。…」

(14) イェーガーは、「科学は、彼の心の奥に在る問い、そして他のすべてのことが依拠している問い、に答えられなかったのである。それゆえに、彼はそれをそのままにしておいた。」と指摘している。ここで言われている、自らのうちにある深い問いに対し安直な納得はせず、その自分の問いを意識して‘保存する’精神のことは、教養(論)の核心に該当することがらを考えさせ、物わがりのよい‘優等生’を批判する見地を着想させる。

(15) エンペドクレース：前495/490年頃～前435/430年頃。ギリシアの哲学者、政治家、神秘宗教家、医者。(松原著)本継続研究(5)のⅡ.2.<注記と考察>(23)を参照のこと。

(16) イェーガーが「次巻で叙述される」と述べていることは、第Ⅲ巻：第4編：第1章「パイディアースとしてのギリシアの医術」のことであり、本継続研究(5)(6)(8)(9)に該当する。

なおイェーガーは、「序文」(1943年7月)のなかで、「私は第Ⅲ巻で、人間の本性(the nature of man)の理論として医術を、それがソクラテースとプラトーンの教養(paideia)の構造につよい影響をあたえていると考えるので、論じる気にさせられた。」と記している。

ところでこの「パイディアースとしてのギリシアの医術」の章は、ドイツ語版では、その第3編(第Ⅱ巻)の二つ目に配置されており、「ソクラテース」(英訳版「ソクラテースの思い出」)に直接につながっていくように編成されている(本継続研究(3)の2.を参照のこと)。したがって、英訳版の「次巻で叙述される」という表現は、ドイツ語版では、「前に叙述されている」という表現になっている。

- (17) イェーガーが原文注記で指示しているのは、ヒッポクラテース『古来の医術について』の12と20である。その12は下記のとおりである（小川訳、岩波文庫）。

「食養生の上での過誤を急速に強烈に被るような体質は、そうでない体質よりも虚弱であるとわたしは主張する。しかし虚弱者は病人にひじょうに近いが、病人の方がもっと虚弱であり、そして食事の適時を失した場合にもっとも余計に苦しむものである。しかし医術に要求される正確度がこのようなものであるのに、常に最正確を期すことは困難である。そのような正確度には医術における沢山の分野が達しており、それらについては後に述べるであろう。しかし、だからといって古い医術を、あらゆる点で正確を得ていなければそれは成立せず、またその研究の仕方が立派でないとして斥けてはならないと考えるものである。それどころかその発見は、深い無知状態のなかから推理により精密への近似点にまで達することができたという理由で、偶然のものではなく立派で正しいものとして驚嘆に値すると見なすべきである。」

- 20は、その前半を引いておくと下記のとおりである。

「次のように説く医者たちとソピステースたちがある、すなわち人間とはなにかを知らない人には医術を知ることはできない、人間を正しく治療しようとする人はこのことを知悉しなければならないと。ところでこの人たちの論は哲学に関係しており、たとえばエンペドクレースその他の人々が自然について、そもそも人間とはなにであるか、最初どのようにして生じたか、なにからできているのかを書いたときである。しかしながらわたしとしては、まずソピステースや医者誰かによって自然について語ったり書いたりされて来たことがら、絵画術と関係があるよりももっと少ししか医術とは関係がないと考えるものである。次に自然についての明らかな知識を得ることは医学以外のどこからもできはせず、そしてそれを知悉することは、ほかならぬ医術そのものの全体を正しく把握してこそ可能なのであって、それまではどうてい不可能だと考えるものである。さて、わたしの主張はこうである。医術とは、人間とはなにであるか、どんな原因によって生じるのか、その他のことをくわしく知ることである。なぜかというに医者にとっては、いやしくもその務めを果たそうとする以上、自然について少なくとも次のことを知り、また知ろうと熱心につとめることが必要だからである。すなわち人間が食べもの飲みものに対する関係、その他の習慣に対する関係、それらの各々から各人に生じる結果はなにであるかを。それは単にチーズは有害な食べものである、腹いっぱい食べると苦痛を与えるから。という具合にであってはならない。それがどんな苦痛か、そしてなぜおこるか、そして人体中のなにに適合しないのかを、わたしたちは知らなければならないのである、他にも同一ではない仕方人間をおかすところの飲食物があるのだから。…」

- (18) ヘーロドトス：前484年頃～前425年頃。ギリシアの歴史家で、「畢生の大著『歴史 Historiiai』は、まとまった形で現存するギリシア最古の史書で、ペルシア戦争（前492～前479）を中心に、大旅行によって自ら採録した知識を豊かに織り込んでおり、その輝かしい業績のゆえに彼は「歴史の父」と称されている。」という。（松原著）
- (19) トゥーキューディデース（トゥーキューディデース）：前464/前455年頃～前

401/395年頃。ギリシアの歴史家で、「しばしば『実証的歴史学の祖』と呼ばれる」という。以下は松原著よりの抜粋である。

「彼の『ペロポネネーソス戦史』(『歴史 Historiai, Ἱστορίαι』8巻は、前411年の夏季までを叙述し、未完ではあるが、国民心理への深い洞察や科学的な資料批判、循環論的歴史観、晦渋で荘重な独自の文体などで評価が高く、批判的歴史叙述の祖とされている(8巻に分割されたのはヘレニズム時代)。この作品を執筆するに当たってトゥーキューディデースは、あらゆる資料の入手に努め、自ら歴史の舞台を実地に踏査、できる限り中立の立場を心がけ、正確に事件を記述。しかし戦争に関係のないことごとく省略したので、一見無味乾燥の感を免れない。とはいえ、前429年にアテナイを襲った疫病流行の惨状や、ペリクレーズの戦没者追悼演説、ハルモディオスとアリストゲイトーンによる「僭主殺し」の真相、などを語る場面には、彼の卓越した文才が遺憾なく発揮されていて、読む者を惹きつけずにはおかない。また事件の真の原因と直接の誘因とははっきりと識別したことは、史学上の大きな進歩といえよう——例えば、ペロポネネーソス戦争勃発の直接の誘因は、ケルキューラ(コルキューラ)とポテイダイア両地をめぐる紛争が主たるものであるが、真の原因はペルシア戦争後のめざましいアテナイの勢力伸張に対するスパルター側の恐怖心と警戒心にあったとする分析——。」

なお、本継続研究(4)のⅡ. 1. <注記と考察>(2)、本継続研究(5)のⅡ. 5. <注記と考察>(9)を参照のこと。また、トゥーキューディデースの『戦史』の思想とヴァイツェッカー大統領演説(1985年5月)の思想との呼応については、拙論「想起に関する研究—社会教育(自己教育・相互教育)の原理をたずねて—」(都留文科大学大学院紀要第7集、2003年3月、所収)を参考にされたい。

(20) イェーガーが原文注記しているクセノポーン『言行録』は、クセノポーンがソークラテースの人となりを説明している箇所、その1.2.4は下記のとおりである(佐々木訳、岩波文庫)。

「…さらにまた肉体も自身これをおろそかにせず、他人のおろそかにするも是認しなかった。されば大食をして過度に働くということは非となしたが、精神に爽快な程度に労役を行なうのは善い事とした。なんとなれば、かかる習慣はよく健康を保たしめ、かつ精神の修養をもさまたげないからであると言った。…」

また『言行録』の4.7.9は下記のとおりである。

「彼はまた弟子たちに、極力健康に留意することを奨励したのであって、こうした知識のある人々からできるだけたくさんのことを学ぶとともに、おのおのの全生涯を通じてよく自分のことに注意を払い、いかなる食べもの、またはいかなる飲みもの、またいかなる仕事か、自分に適しているか、またどんな風にこれらを用いたらもっとも健康に暮せるかを、見つけておくべきであると言った。なんとなれば、こういう具合に自分の身体に注意する人より、もっとよく自分の健康によいものを知っている医者というものは、とうていほかに見つかるものではないからであった。」

3. 公共の空間としてのギムナシオン（体育訓練場）が知力の体操の場ともなっていく

<訳文> 34p ~ 36p

われわれは、ソクラテースがアテーナイで、彼の弟子たちの対話篇が彼が没頭していたとして描いている、その働きを始めたとき、彼が何歳であったのかは分からない。プラトーンは、彼の対話篇のいくつかをペロポネネーソス戦争の勃発の年に設定している——例えば『カルミデース』では、ソクラテースはポテイダイアの厳しい戦闘からちょうどもどってきたところである。そのとき彼はおおよそ 40 歳であった；しかし疑いもなく彼はそれよりも少し前に教え始めていた。プラトーンは、彼の対話の生きた文脈が非常に重要であると考えた——それで彼は繰り返しそれをもっとも好意あふれる詳細さをもって叙述した。ソクラテースは、大教室の時間を超越した抽象的な世界で話したりはしなかった。彼は、アテーナイ人の体育の学校 (athletic school, Ringschule) であるギムナシオン (体育訓練場: the gymnasium, des Gymnasion)⁽¹⁾ の忙しい生活がふさわしい、そこでは、彼はすぐに、トレーナー (the trainer, Gymnast) や医師のように、いつもなくてはならない訪問者 (visitor, Gestalt 人物) となった。^(52a) もちろん、全アテーナイに有名となっていた彼の対話に参加した者は、必ずしも競技者が通常そうするスパルター式の裸で突っ立っていたわけではない、とはいえ彼らはしばしばそうしていたかもしれない。しかしソクラテースが自分の全人生を使い果たした劇的な思考の決闘 (the dramatic duels of thought, dramatischen Denkkämpfe 劇的な思考の格闘) が体育訓練場 (gymnasium, das Gymnasion) で起きたということは、単なる偶然ではなかった。ソクラテースの会話と、試合のリングに上がる前に医者あるいはトレーナーによって検査されるために裸になる行為との間には、問題の核心を衝く象徴的な類似があった。プラトーンはソクラテース自身にこの対比を何回かささせている。⁽⁵³⁾ 当時のアテーナイ人は、自分が眠ったり食事をしたりする家の狭い四つの壁の間でよりも、体育訓練場の方がよりくつろいだ。そこに、ギリシアの空の明るい光のなかに、老いも若きも自分たちの身体の健康を保つために毎日集まった。⁽⁵⁴⁾ 休憩の中休みは語らい (conversation, Gespräch) でふさがっていた。疑いもなくそれはしばしば単なる世間話であった；それなのに、世界でもっとも名高い哲学の学校——アカデーメイアとリュケイオン——は、よく知られたアテーナイの運動競技場 (athletic grounds, Ringplätze (古代の) 格闘競技場) の名をもっているのである。議会 (the assembly, die Ekklesie)⁽²⁾ や裁判所では適切に語られ得ない言うべき共通に重要な (of general interest, von allgemeinem Belang) 何かもつものは誰も、体育訓練場に行き、そこでそれを友人や知人に語った。そこでだれにあうだろうかと想像することは、いつもわくわくさせることであった。気分転換に、人は、私的なものであれ公的なものであれ多くの (あらゆる大きさの: in jeder Größe) そのような公共施設 (such institutions, solcher Übungsplätze そのような運動場) のいずれをも訪れることができた。⁽⁵⁵⁾ 人間 (people, den Menschen) それ自体に関心をいなくソクラテースのような *habitus* (常連) は、その場にいるだれをも知っていた；だから、新顔の誰も (とりわけ若者の間の)、彼の注意を引くことなしに、また誰であるか尋ねられることなしに現われることはできなかった。若い人たち (the young, der heranwachsenden Jugend 成人に近づいた世代) の鋭い観察者として、彼は無比の存在であった。彼は人間性 (human nature, Menschenkenner 人間通) に関する偉大な権威であっ

た。彼の的を射た (sharp, scharfgezielte) 質問は、あらゆる才能、あらゆる潜在能力が試されることになる試金石であった；そしてもっとも名望のある市民たちは、自分の息子の養育 (the upbringing, die Erziehung 育成) について彼の助言を求めた。⁽³⁾

ただ饗宴 (symposium, die Symposien)⁽⁴⁾ のみが、その背後に伝統の重みをもって、体育訓練場 (gymnasium, den Gymnasien) の精神的な活力 (the intellectual vitality, geistiger Bedeutung 精神的な価値) に匹敵することができた。それゆえにプラトーンとクセノポーンはソクラテースの対話を、これらの双方の環境において行われたものとして描写する。《56》彼らが述べる他の場面はすべて、多かれ少なかれ偶然である——例えばアスパシアーのサロン⁽⁵⁾ でとか、あるいは人々がおしゃべりをしにあつまってくる市場の店 (the shops, den Buden 小屋掛けの店) でとか、あるいは著名なソフィストの訪問中には (during a famous sophist's visit, bei dem Vortrag eines berühmten Sophisten 著名なソフィストの講演の際には) 裕福な哲学のパトロンの家でとかである。体育訓練場は、すべてのなかでもっとも重要な集合場所 (meetingplace) だったのであり、なぜなら人々はそれら (= 体育訓練場) に規則正しく通っていたからである。それらは、単なる身体のための訓練場 (training-grounds) ではなかった：精神と精神との出会いを助長することによって、それらは、自らをいかなる新しい思想や熱中に対してもっとも受容性に富んだ土壌とする、ある知的な熱 (an intellectual heat, gewisse Eigenschaften ある種の性質) を生み出したのである。それらは、余暇と休養の場所であった：どんな特殊な利害関係も (special interest, rein Spezielles 全くの特殊性) そこに長くは生き残ることはできなかったのであり、そして商売もそのような環境ではなされ得なかった。⁽⁶⁾ それゆえに、それらへの常客は、人生の普遍的な問題 (the general problems of life, allgemeinemenschliche Probleme 普遍的な人間の問題) をますます喜んで論議するようになった。そうして彼らはその主題だけではなく、それが論議される知的な巧みさやしなやかさにも興味をもったのである。一種の知力の体操 (intellectual gymnastics, eine Gymnastik des Denkens 思考の体操) になってきたのであり、それはすみやかに身体の訓練とまったく同じように入念となり、まったく同じように大いに讃美された。それはすぐに、身体の訓練 (physical training) が長く考えられてきたようなパイディア (鍛錬：paideia, der Paideia)⁽⁷⁾ の一形態であると認知された。ソクラテースの 'dialectic, Dialektik (ディアレクティケー)'⁽⁸⁾ はまったく独特の (individual, einzigartiges 比類のない) 土着の種類のエクササイズ (exercise 運動) であって、同時に現われていたソフィストの教育方法 (educational method, Bildungsmethode) とは正反対のものであった。⁽⁹⁾ ソフィストたちは、名声の明るい輝き (the bright light of fame, Nimbus unnahbarer Berühmtheit 近寄りがたい名声の光輪) に取り巻かれた、また熱愛する生徒たちの集団に敬慕された、外国生まれの巡回する教師たちであった。彼らはお金のために教えた。彼らは知識の専門的な技術ないし分野で教授し、そして選ばれた公衆 (public, Publikum 聴衆) ——有産階級の教養に貪欲な (culture-hungry, bildungsbeflissenen 勉学熱心な) 息子たち——に語った。彼らの長い派手な講義 (Solovortrag 一人講演) は個人の家や即席の講義室で話された。他方ソクラテースは、誰もが知っている、一人の素朴なアテーナイ人 (Athenian, Bürger 市民) であった。彼の影響はほとんど気づかれぬほどのものであった：彼は、自然に湧き起るまま (spontaneosuly, zwanglos 自由に)、明らかに意図をもたず、たまたま話

題になるどんな問いについても会話を始めたものである。彼は教えなかったし、弟子 (pupils, Schüler) を一人ももたなかった——少なくとも彼はそう言っている。彼はただ友人、あるいは仲間をもっただけである。若者たちは、何ものも抵抗できない彼の辛辣な精神の切れ味に魅了された。彼は彼らにとって、いつも新しい、真にアッティケー風の見もの (Schauspiel, drama 劇的なもの) であった：彼らはうっとりとした心をもって耳を傾けたのであり、彼らは彼の勝利を熱狂的に賞賛したのであり、そして彼らは同じ方法で、自身の家や自分の友人たちの間で人間性 (human nature, die Menschheit 人間としての存在、人間性) を審問する (examining, examinieren) ことによって、彼を真似ようとしたのである。アテーナイの選りすぐりの知性をもつ若人たちはソークラテースに引きつけられ、そして、いったん彼らが近づいてしまったら、彼の引きつけるような人格の魅力は彼らを二度と解き放ちはしなかった。彼を傲慢な無関心さや冷たいよそよそしさで扱おうとする者はだれも、あるいは、彼の学者ぶった問いの形式や彼の事例の故意によるささいなことへのこだわりを腹を立てる者はだれも、すぐに軽蔑的な態度を止めてその場に謙虚に立たなければならなかった。

<注記と考察>

(1) ギュムナシオン (体育訓練場；γυμνάσιον, gymnasium, Gymnasium)：古代ギリシアの「ギュムナシオン」の訳し方はいろいろあるが、松原著は「体育訓練場」としているのので、ここでの訳も「体育訓練場」としておいた。イエーガーの論述においても古代ギリシアにおけるギュムナシオンは重要な位置をしめているので、その概略を理解するために松原著の「ギュムナシオン」の項目を下に引いておく。

「ギリシアの体育訓練場。公的な施設で、男子青少年が全裸 (gymnos「裸体の」の意) になって運動競技の練習をしたので、この名がある。通例、列柱廊 (ストア) に囲まれた四角い広場で、競走や幅跳び、槍投げ、円盤投げなどの練習場になっていた。若者たちがレスリングやボクシングなどを教わる私営のパライストラとは区別されるが、「パライストラ」なる語は、ギュムナシオンに付属する格闘技専用の建物にも用いられた。スタディオンや浴室のほか、雨天用の屋根付き練習場 ksyostos (クシュストス)、マッサージ室、脱衣室などが併設されており、ギリシア的生活に不可欠のものとして地方の小都市にも建設されていた。ふつう市壁の外にあり、青年たち (エペーボーイ) の軍事訓練場となったほか、付属の列柱廊では哲学者や修辞学者ら各種の教師が自説を開陳したり議論するなど、体育以外の教育の場としても大いに役立った。ギュムナシオンには神々の祭壇が設けられ、特に愛の神エロースは男性間の恋愛を称揚するため好んで崇拝された。ヘレニズム文化の伝播につれて、ギュムナシオンは地中海諸国はおろか遠く中央アジアにまで建設され、ユダヤ人の青年たちは割礼の痕跡を隠す包皮再生手術を受けて、トレーニングに熱中したという。共和制期には裸体競技を尊重しなかったローマ人も、帝政期に入ると次第にギリシア式体育を模倣するようになり、ネロー帝やコンモドゥス帝らがローマ市に公立ギュムナシウムを建造している。アテーナイでは、アカデーメイア、リュケイオン、キュノサルゲスの3大ギュムナシオンが名高い。

なお、ギムナシオンは、後世ドイツ・スイスのギムナジウム Gymnasium (高等学校) や、英・仏などの「体育館」(略称・ジム) を指す言葉の語源となっている。」

イエーガーは、古代ギリシアのギムナシオンが、ギリシア思想の形成の場として、身体と精神との双方の訓練の場であったことに注目しているが、ギムナシオンの総合的な機能の実像は、この松原著の説明からも理解される。

(2) Ekklesie : Ekklesia は ἐκκλησιᾶ エクレシーア : 集会、民会、議会、国民議会

(3) この段におけるイエーガーによるギムナシオンの叙述は、ただちにイギリスの「コーヒー・ハウス coffee・house」、アメリカの「ライセアム Lyceum」運動を想起させるが、古代ギリシアのギムナシオンは、市民(都市国家アテナイの民主制においては「自由市民」が成立する)自身による自己教育・相互教育を本質とする近現代の社会教育の直接的な源流に相当しよう。それは、むしろ時代が下るにしたがって機能分化し、失われがちな公共空間の、本来の本質を想起させる。

なお「コーヒー・ハウス」については、碓井正久は「コーヒー・ハウスは、ピューリタン革命頃には、階層を問わぬ集会の場所であったが、18世紀になると、中・上流階級の集まりが中心であった。それがまた大衆化するのには19世紀になってである。」と、また「ライセアム」運動については、「1826年、ホルブルック (Holbrook, J.) の創意によりマサチューセッツ州ミルバリ (Millbury) に生まれたのがはじめて、31年には千組のタウン・ライセアムが集まって全国組織を作った。無償公立学校運動の中心勢力になる。」と注記している(碓井『社会教育の教育学』国土社、1994年)。

(4) Συμπόσιον (シュンボシオン) : 「一緒に飲むこと」の意味で、「ギリシアの酒宴・饗宴。晩餐(デイプノン) deipnon, δεῖπνον が済んだ後で、神々に酒を捧げてから来会者一同が花冠(ステパノス) stephanos を戴き、寝椅子に横臥しつつ酒杯を交わした。宴会の座長シュンボシアルコス symposiarkhos, συμποσίαρχος が選ばれて、乾杯を發議したり、談論の主題を提案したり、余興を指示したりする。余興は歌・豎琴・笛などの音楽が主で、その他コッタボス kottabos, κότταβος という酒杯に残った葡萄酒(ワイン)を目標の容器に投げ入れるゲームや骰子遊びをしたり、遊芸人の軽業や少年の舞踊を見物して楽しんだ。プラトーンの『饗宴』のように哲学的議論を交わすなど相互の会話が重んじられ、豪勢な宴席では客1人1人に酌童が附いたが、遊女やヘタイラーを除いて女性が参加することはなかった。」とされる。また「今日の討論会、談話会などを意味する用語シンポジウム symposium は、このシュンボシオンという古代ギリシア語に由来する言葉である。」ということである。(松原著)

(5) ドイツ語版では、「才気あふれる会話で: in geistreicher Konversation」(のソークラテース)、という表現が付されている。

(6) ポリスにおけるもう一つの公共的空間としてアゴラー (ἀγορά) がある。松原著では次のように説明されている。

「[集会] 転じて「集会所」の意。ギリシア都市国家(ポリス polis) の中心広場。政治的な広場と市場を兼ねた独特のもので、役所や神殿、柱廊(ストア)などの公共建築物が多く建てられ、ストアには種々の店舗が連らなっていた。たんに「市場」と訳されることもあるが、経済活動のみならず、市民の集会もここで

開かれ、選挙・訴訟事件をはじめ、政治や学問も論ぜられて、ポリスにおける公共生活・日常生活の中心をなした。」

- (7) παιδεία (パイダイアー) は歴史的に複数の意味合いをもちながら推移しているが、古川編『ギリシャ語辞典』では、「養育」「訓育、教育；鍛錬；教育の結果身についたもの、教養」「躰け、懲戒」「幼少時代；(集合的に) 若者達」という訳語が示されている。小論のこの箇所には、「鍛錬」を充てておいた。
- (8) dialectic は δια-λεκτικός (対話の、対話に長けた) に由来する。その名詞形が「問答法、弁証法」である。なお、δια- は「互いに、対立して、競り合って」、λεκτικός は「弁舌に長じた」である。また、δια-λέγω は「話し合う、討論する、弁証法 (対話法) を用いる」である。
- (9) イェーガーはソクラテースの「問答法」を「運動」(exercise) として説明している。このイェーガーの叙述は、古代ギリシア医術と哲学との関係史の分析・論証を受けてのものであるから、「運動」は、魂の「健康」のための養生法、という意味合いをもつ。そしてイェーガーは、「問答法」のこのような歴史的な意味合いにおいて、それがソフィストたちの教育法とは正反対のものだと指摘する。このイェーガーの、ソクラテースの「問答法」とソフィストたちの教育法との違いの思想史的な説明は、教養・教育思想の考察にとって非常に現代的な意味をもっているように思われる。

4. 眼前の一人ひとりの幸福を気遣う行為としてのフィロソフィー (愛知)

<訳文> 36p ~ 37p

この未知の複雑な人物 (this strange and complex person, dieses Phänomen この非凡な人物) を説明するたった一つの描写を見出すことは、簡単ではない。愛情に満ちた気配りと丹精込めた詳細さをもって、プラトーンは彼の独特の流儀を描写している；しかし、そうすることによって、ソクラテースは定義され得ないということ——彼は具体的に経験されなければならないということ——示唆しているように見える。他方、なぜ厳格な哲學家たちが、プラトーンが描くソクラテース像におけるこれらの相貌すべてを単なる詩的装飾として片づけてしまうのかを理解することは容易い。⁽¹⁾ それはすべて、哲學家たちが動き存在する根拠たるべき抽象的思考の高度の水準の、その下に (beneath, unterhalb des „Niveaus“ 水準の下方に) 横たわっているように見える。ソクラテースの生きている人間への知的なものを超えた影響を劇的に (dramatically, anschaulichen 生き生きと) 示すことは、彼の知力を叙述する単なる間接的な方法でしかない。それでも、彼が話をしている現実に存在する個人の (individual, des einzelnen Menschen 一人ひとりの) 幸福へのソクラテースのあふれるほどの気遣い (the full Socrates' concern, seine Bemühung 彼の骨折り) を実感しなければ、われわれは彼が何を言っているのかを理解することはできない。哲學家たちはそのような関係を抽象的、学術的な意味において本質的ではないと見なすかもしれないが、プラトーンは、ソクラテースにとってそれは本質的であったということを示している。そうしてそのことは、われわれがいつも彼を *we* (*wir* われわれ) が哲学と呼ぶ媒介をとおして見るおそれがある、ということをわれわれに感づかせるのに十分である。確かに、ソクラテース自身が自分の 'activity 活動 (Tun : 行為)' (πράγμα 行為・行動——(じつに : sehr) 特徴的な言

葉である) を ‘philosophy (Philosophie)’ として ‘philosophizing (Philosophieren)’ と呼んでいる。⁽²⁾ プラトーンの『弁明』において、彼は陪審員団に、自分が生きて息をする限り決してそれを止めないだろうと請け負っている。⁽⁵⁷⁾ しかし (そのさい: dabei) われわれは、彼が、philosophy が後の世紀に長い発展経過を経て成ったもののことを——抽象的な思考方法、あるいは理論的言説から成る一連の学説というそれを創造した者から分離して考えられやすいもの、のことを——言っていると考えるはならない。ソクラテース文学 (Socratic literature, Literatur der Sokratiker) の全てが、異口同音に、ソクラテースの学説は彼特有の持ち味 (his individual self) から分離され得る、ということを否定している。

<注記と考察>

- (1) イェーガーは、プラトーンの諸対話篇におけるソクラテースの対話の描写を単なる「詩的装飾」と解してはならないと論述している。つまり、対話篇を焦点にする一群の「ソクラテース文学 (the Socratic Literature)」が成立したのであるが、イェーガーは、その「文学」性はソクラテースの思想の「装飾」ではなく、本質そのものの表現なのだと洞察している。このイェーガーの観方は、近現代にいたる、文学の成り立ちと教養・教育の思想の根源そのものを考えさせる。
- (2) πράγμα (プラーグマ): 「行為、行動」「出来事、事件」「問題になっていること、重要な問題」「事実」。

φιλο-σοφία (フィロソフィア): 「知を愛し求めること、愛知」「哲学」(久保勉訳(岩波文庫)では、該当タームは「知恵を愛求したり」と訳されている)。《原文注記》57. の<注記と考察> (23) を参照のこと。イェーガーは、近現代的な「哲学」の源にある、このソクラテースの、「知を愛し求める」行為の主張そのものに、古代思想史における大きな展開を見ている。

5. フィロソフィー = 一つの精神過程としての「熱心な勧告」と「厳しい試問」

<訳文> 37p ~ 38p

それでは、あの ‘philosophy’ という、プラトーンがソクラテースをその原像と考え、ソクラテースが自身の弁明でそれへの固守を公言している、そのものは何なのか。プラトーンは、多くの対話でその本質を説明している。プラトーンは、ソクラテースとその対話者によって始められた査問 (enquiries, der Untersuchung) の results (成果, das Ergebnis) にますます重きを置くようになっていく; しかし彼は、そうするとき、自分はおもソクラテースの精神の本質に忠実であると感じていたに違いない。彼は、それぞれの対話 (each dialogue, all diesen Untersuchungen このすべての試問) を、それがその (=あの ‘philosophy’ の) 肥沃さを新たに証明するように計画した。しかしわれわれにとって彼 (=プラトーン) のソクラテースがソクラテースよりもよりプラトーンになる地点を定めることは困難なので、われわれは ‘philosophy’ を、彼 (=プラトーン) のもっとも明確で簡潔な表現に基づいて定義しようと試みなければならない。そうしたものは実に多くある。『弁明』で、ソクラテースになされたどつともない不当行為 (wrong, Unrechts) に未だに (still, noch) ぞっとさせられつつ、そして、彼の師のた

めに他の門弟たちを獲得することを期待しつつ、彼は、もっとも短く簡素な形式で彼の仕事の本質と意味を述べた。(たしかに: zwar) 陳述は、余りにも巧妙に構成されていて、ソクラテースが即興的に法廷でなした実際の陳述 (speech, Verteidigung 弁明) の単なる校訂版 (a revised version, eine Nachbildung 模写) とは思えない; (58) それでもそれは、ソクラテースの実生活と人間性に驚くほど忠実である。⁽¹⁾ それは、喜劇詩人と世論によって生み出されていたソクラテースの戯画 (the caricature, das Zerrbild (故意に) 歪曲された像 (描写)、カリカチュア) を正し、否認することで始める; そうしてそれから philosophy (Philosophie) への信頼の (かの有名な: jenes) 感動的な公言 (profession, Bekenntnis 公言、告白) がつづくが、それはプラトーンが、エウリーピデースの有名なミューズへの忠誠心の公言に類似する一片を意図したものである。⁽⁵⁹⁾ しかしソクラテースは、差し迫った死 (death, Todesurteils 死刑の宣告) を目の前にしてその公言をしている。彼が奉仕する力 (the power, die Macht) は、われわれの人生を美しくし、われわれの苦しみを和らげることができるだけでなく、それは世界に打ち勝つことができる (can conquer the world, weltüberwindend) のである。この‘私は philosophy (zu philosophieren) を決して止めないであろう’という言明の直ぐ後に、彼の話しと教えの方法の典型的な例がつづいている。その内容 (content, des Gehaltes) を理解するために、われわれはその形式 (form, der Form) ——プラトーンの著作の、此処や多くの別の下りで体現されているような——から始めなければならない。

彼は本来の (true, eigentümlich 特有の) ソクラテースの方法を二つの主要な装置 (main devices, Hauptformen 主要な形態) に還元する: つまり、熱心な勧告 (exhortation, Mahnung) (*protreptikos*)⁽²⁾ と厳しい試問 (examination, Prüfung) (*elenchos*)⁽³⁾ である。⁽⁴⁾ 両者は質問の形態で言い表わされる。その質問形態は最古の *parainesis* (勧告),⁽⁵⁾ ないし激励 (encouragement) の型式からの伝来物であり、われわれはそれを、悲劇を通し、叙事詩にまで遡ることができる。プラトーンの『プロタゴラス』の導入の会話 (中庭での会話: Hofgespräch) に、われわれはソクラテースの両者の装置 (devices, Redeformen 話の形態) を並列状態でもう一度出会うことができる。⁽⁶⁰⁾ ソクラテースを偉大なプロタゴラスと対比させるその対話は、ソフィストたちが教えていたあらゆる種類の型にはまった形式をわれわれの前にひけらかす (parades, paradiieren 展示されている): つまり、神話、議論による証明、詩の解釈、質疑応答による探究など。それにしても (but, aber auch かといってまた) ソクラテースの他に見られない固有の話す方法 (methods of speech, Redeformen) は、最高の異様な些事へのこだわり (pedantry, Pedanterie) と皮肉のこもった謙遜さのなかに、いかにもユーモラスに生き生きと描写される。『弁明』においても『プロタゴラス』においても、プラトーンはわれわれに、ソクラテースの語りの二つの基本的な装置 (two basic devices, zwei Grundformen) ——熱心な勧告 (exhortation, die protreptische) と厳しい試問 (examination, die elenktische) ——は基本的にお互いに同種のものである、ということを教えている。実際に、それらは単に同一の精神過程の異なる段階にすぎない。このことは『弁明』によって証明され得るのであって、そこではソクラテースは自分の方法を次のように語っている:⁽⁶¹⁾

<注記と考察>

- (1) プラトンの『弁明』の記録性、創作性をめぐっては、そのイェーガーの理解と『弁明』を和訳した久保勉の理解の主旨とはほぼ一致している。久保はその「解説」で次のように述べている（岩波文庫、1997年発行のものに拠る）。

…特に『弁明』におけるソクラテスの言葉は、その構成と排列が極度に芸術的——これはプラトンのものであろう——であるにもかかわらず、全然即席の弁明であるという印象を与えるのである。

プラトンは裁判の当時傍聴席にあったにもかかわらず（『弁明』第28章）、ソクラテスのなした弁論には草稿などはなく、即座に行われたものであるから、本篇を書くにあたってプラトンはただ自分の記憶にたよる外なかったのであるが、彼はまた必ずしも速記者の如く言葉通りの忠実なる再現を志したのでもないことは想察に難くない。詩人としてのプラトンは、あたかも真の画家が肖像を描く時の如く、必ずや芸術家的見地よりして事実の上になりに自由なる取捨を、否、恐らく多少の添加をさえ施すの必要を感じたであろう。しかもまたこれは決して事の本質と真精神を歪曲するが如きものではなく、偶然なことはすべてこれを除外して歴史的事件を永遠の見地に引上げることによって字句以上の真実を、いっそう明確に発揮するためであったに相違ない。しかもまた彼は見事にこれに成功しているのである。ところがもう一人の証人たるクセノフォンの『ソクラテスの追懐』の如きは、プラトンの初期の対話篇に比し、…（以下は略）…

久保の「解説」は、第六班改訂（大正12年10月）の昭和6年発行のものと同趣旨はほぼ同じで、久保の理解の卓越性を確認するために、該当箇所を下に引いておく。

プラトンは裁判の当時傍聴席に在ったに拘らず（『弁明』第28章）、その『ソクラテスの弁明』が必しも詞通りの忠実なる報告でないことは想像に難くない。詩人としてのプラトンは、恰も真の画家が肖像を描く時の如く、必や芸術家的見地よりしての事実の上に可成り自由なる取捨を施すの必要を感じたであろう。而もまたこの取捨たる、決して事の本質を、真精神を牽強付会するが如きものではなく、寧ろ字句以上の真実を、『永遠の見地から見たる』真実を、一層明確に発揮する為であったに相違ない、而もまた彼は見事に之に成功したのである。ところがクセノフォンの『ソクラテスの追懐』の如きは、プラトンの初期の対話篇に比し、…（以下は略）…

イェーガーの叙述は、この久保のような理解の仕方に関連しているが、記録性、創作性をめぐる問題自体を探究の対象とし、独自の本質的な考察を展開しているといえよう。（なお『弁明』の記録性、創作性をめぐっては、田中美知太郎はその訳の「解説」で一般的な推量を語り、「プラトンを疑うよりも、むしろ信ずる方が、歴史的眞実に近いところへ出る早道となるのではないか。」と締めくくっている。『プラトン全集 1』岩波書店、1975年、所収。）

- (2) προτρεπτικός (プロトレプティコス) : 説得する、勧告する、鼓舞する
 (3) ἔλεγχος (エレンコス) : 反駁、論駁、吟味、試験、探究
 (4) プラトンはソクラテスの会話の形式の本質を、二つの要素に還元されると観察している、ということである。イェーガーのこの叙述は、プラトンの対話篇

が、ソクラテースの会話に対するプラトーンの洞察に拠っていること、またそれが、プラトーンのものではなく、ソクラテース自身のものであること、を指摘するものとなっている。

なお examination をどう訳すかであるが、『弁明』29e には、「…それでも私はすぐには彼を放さずまた自分もそこを動かずに、彼に質問し (ἐρήσομαι, question)、彼を精査し (ἐξετάσω, examine) また厳しく試問し (ἐλέγξω, cross-examine)、…」(久保訳、岩波文庫)、とある(岩波書店『プラトン全集 1』では「…その者をわたしは、すぐには去らしめず、またわたしも立ち去ることをせず、これに問いかけて、しらべたり、吟味したりするでしょう。)。そこで使われている、ἐρήσομαι (ἐρομαι) は「質問する」、ἐξετάσω は「仔細に調べる、吟味する、試す、取り調べる」、ἐλέγξω は「吟味する、取調べる、試す、問い質す」という意味をもつ。イエーガーは、エレンコスの意味で Prüfung (試験、吟味) を使い、それをハイエットは examination と訳しているので、小論では、久保訳を参考にしつつ、「厳しい試問」と訳しておいた。

(5) παρ-αίνεσις (パライネシス)：勧告、激励；忠告。

(6) 原文注記で 指示されている『弁明』29df. は、《原文注記》の〈注記と考察〉(23)の途中から続く部分であり、『プラトン全集 1』(岩波書店)では次のように訳されている。

…すなわちわたしの息のつづくかぎり、わたしにそれができるかぎり、決して知を愛し求めること(哲学)(φιλοσοφῶν, philosophy)を止めないだろう。わたしは諸君に勧告し、いつ誰に会っても、諸君に指摘することをやめないだろう。そしてその時のわたしの言葉は、いつもの言葉と変りはしない。世にもすぐれた人よ、君はアテナイという、知力においても、武力においても、最も評判の高い、偉大なポリス(市民国家)の一員でありながら、ただ金銭を、できるだけ多く自分のものにしたいというようなことに気がつかっていて、恥ずかしくはないのか。評判や地位のことは気にしても、思慮と真実には気がつかわず、たましい(いのちそのもの)を、できるだけすぐれたよいものにするように、心を用いることもしないというのは、と云い、もし諸君のうちの誰かが、これに異議をさしはさみ、自分はそれに心を用いていると主張するならば、その者をわたしは、すぐには去らしめず、またわたしも立ち去ることをせず、これに問いかけて(ἐρήσομαι, question)、しらべたり(ἐξετάσω, examine)、吟味したり(ἐλέγξω, cross-examine)するでしょう。そしてその者が徳(よさ)を、もっているように言い張っているけれども、実際にもってはいないと、わたしに思われるなら、いちばんたいせつなことをいちばんそまつにし、つまらないことを、不相応にたいせつにしているといつて、わたしは非難するでしょう。このことは、老若を問わず、誰に会っても、わたしの行なおうとすることであって、よそから来た者にも、この都市の者にも、そうするでしょう。しかしどちらかといえば、この都市の者に対して、よけいにそうするでしょう。あなたがたは、それだけ種族的にわたしに近いわけですからね。つまりわたしが、こういうことをしているのは、それが神の命令だからなのです。そしてわたしの信ずるところでは、諸君のために、このポリスのなかで、神に対するわたしのこの奉仕以上に、大きな善は、いまだひ

とつも行なわれたことがないのです。

つまりわたしが、歩きまわって行なっていることはといえば、ただ次のことだけなのです。諸君のうちの若い人にも年寄りの人にも、誰にでも、たましいができるだけすぐれたよいものになるよう、ずいぶん気をつかわなければならないのであって、それよりも先に、もしくは同程度にでも、身体や金銭のことを気にしてはならないと説くわけなのです。…

6. 『弁明』における、有名な、フィロソフィーへの信頼の公言

<訳文> 38p

‘私は、知を愛し求めることを (philosophizing, zu philosophieren)、⁽¹⁾あるいはあなた方に熱心に勧めることを (urging, zu ermahnen 勧告する)⁽²⁾、また私が会うだれに対しても、いつもの私の仕方以下のように述べながら、私の主張の正しいことを明瞭に示すことを、決してやめないであろう：“わたしの親愛なる方よ、あなたはアテナイ人であって、もっとも偉大にしてその知恵 (wisdom, Weisheit) と力 (power, Macht) において非常に名高い都市の、その市民である；そのあなたが、善と真理の知識 (the knowledge of good and truth, die Erkenntnis dessen, was gut und wahr ist)⁽³⁾と自らの魂 (your soul, deine Seele) を善くするために気遣いしないで、⁽⁴⁾自分の富とその蓄財、あるいは自分の世評、あるいは自分の名誉のことに頭を煩わしていることに恥ずかしくはないのか？”そしてもしだれかが私に反駁し、自分は自分の魂のことに頭をつかっていると、言えば、私はすぐに彼を放免もせず自分も立ち去らないで彼を問い (question, fragen)、彼を吟味し (examine, prüfen)、彼を論駁する (refute, widerlegen) だろう⁽⁵⁾；そうして、もし私が、彼は徳 (virtue, Arete) をもっていないくて、単にもっていると言っているだけだと考えたら、私は彼を、もっとも価値あるものを過小評価しているからと、また重要でないものを尊んでいるからと、非難するだろう。私はこのことを、若い者にも年とった者にも、異邦人にも市民にも、会う人すべてに——しかしとくに、あなたがたアテナイ市民に——するだろう、なぜならあなた方は血筋が私に近いからだ。というのは、このことは、あなた方は理解すべきであるが、神の私への命令なのである；そして私は、この私の神への奉仕以上に善いこと (good, Gut) が (わたしたちの都市で：in unserer Stadt) あなた方に起きたことはかつてなかったと判断する (think, glaube 信じる)。というのは、わたくしのすることはただ、歩き回り、あなた方のなかの若い者や年とった者に、自分の魂を完成すること (the perfection of your souls, die Vollkommenheit eurer Seele) ほどに自分の身体や財産に注意を向けることのないように、説得する (persuade, überreden)⁽⁶⁾ ことだけなのである。⁽⁷⁾

<注記と考察>

- (1) philosophizing は、ローブクラシカルライブラリーでは φιλοσοφῶν (philosophy) となっているので、「知を愛し求める」と訳しておいた。
- (2) urging はローブクラシカルライブラリーでは παρακελεύόμενος (exhorting) であり、「勧告する、教える、激励する」という意味である。
- (3) 「善…の知識」は、ローブクラシカルライブラリーでは (φρονήσεως, wisdom : 思慮、

- 知恵) となっており、久保訳 (岩波文庫) では「智見」と訳され、『プラトン全集 1』 (岩波書店) では「思慮」と訳されている。
- (4) 「気遣いしないで」 (instead of worrying about) はドイツ語版では「気遣いもせずそのことにむとんじゃくでいること」 (sorgst du nicht und bist unbekümmert um sie) である。ローブクラシカルライブラリーでは οὐκ ἐπιμελεῖ οὐδὲ φροντίζει (neither care nor take thought for) である。ἐπι-μελέομαι は「配慮する、気遣う、面倒を見る、顧慮する」という意味をもち、φροντίζω は「考える、注意を払う、気に掛ける、関心を持つ」という意味をもつ。ソクラテースは、アテーナイ市民と対話しながら、彼らの内に、人間にとってもっとも重要な問題への「関心」を喚起するように働きかけたのである。なお、戦前日本の唯物論哲学者である戸坂潤は、その小論「教育と教養」 (『戸坂潤全集 第4巻』勁草書房、1966年、所収) において、この「関心」を論じている。戸坂の教養論については、拙論「社会教育研究としての戸坂潤研究——「科学の大衆性」概念を軸にして——」 (『社会教育学・図書館学研究 第2号』1978年、所収) を参照されたい。
- (5) この箇所のタームをローブクラシカルライブラリーで確認しておく次のようである。
 ἐρήσομαι (question) : ἔρομαι 「問う、質問する」
 ἐξετάσω (examine) : ἐξ-ετάζω 「仔細に調べる、吟味する、尋問する」
 ἐλέγξω (cross-examine) : ἐλέγγω 「非難する、吟味する、問い質す、論駁する」
- (6) この箇所のタームはローブクラシカルライブラリーでは πείθων 「説得する」 (urging: 説得する、勧める) である。
- (7) 「ほどに…ないように」と訳した箇所は、ドイツ語版では nicht zuerst und nicht so sehr となっている。参考までに、久保訳 (岩波文庫) では「…それよりも先にし、またいっそう熱心に、することがないように…」と訳され、『プラトン全集 1』 (岩波書店) では「それよりも先に、もしくは同程度にでも、…」と訳されている。

7. ソクラテースは、通俗的な価値理解を批判し、新たに魂の卓越性 (アレテー) を最上位のものとして提起する

<訳文> 38p ~ 40p

ソクラテースは、自分は ‘philosophizes’ (知を愛し求める) のだと言っている。明らかに、彼はこのことばで、自分は抽象的な思考 (thought, Denkprozeß 思考過程) に携わっているということではなく、自分は熱心に勧め (exhors, Ermahnen 勧告)、教えている (teaches, Erziehen 教育) ということを意味して言っている。⁽¹⁾ 彼が使う方法の一つは、ソクラテース的な吟味 (examination, Prüfung 試験・吟味) であり、あらゆる (単なる: bloßen) 見せかけの知識 (sham knowledge, Scheinwissens) や (ただの: nur) 見せかけの卓越さ (artificial excellence, eingebildeten Vortrefflichkeit うぬぼれの卓越さ) (arete) を論駁する (refutation, Widerlegung) ことである。その吟味は、それ (= その吟味) は大抵それ (= ‘philosophizes’) のもっとも独創的な側面であるように思われるのではあるが、彼が述べているような全過程の単なる一部分である。しかし、この対話的な ‘人間の吟味’ ——それは、それが残りのものよりもより理論的な要素を含んでいるので、一般にソクラテース哲学の本質と考えられている——の特徴 (the character, das

Wesen 本質) を研究する前に、われわれはソクラテースの導入の勧告のことば (speech of admonition, Mahnrede 勧告の発言) をもう少し詳細に注視しなければならない。彼が、いつも金儲けをすることに燃えている実業家の存在を彼自身のより高い理想 (ideal, Lebensforderung 人生への要求) と比較するとき、彼の比較は、人びとがもっとも高く評価する財産 (the goods, Gütern) に与える世話ないし配慮 (the care or attention, dem Gedanken der bewußten Sorge oder Pflege 意識的な世話ないし配慮の考え) に依拠する。蓄財の世話の代わりに、ソクラテースは自分の魂の世話 (care for one's soul, Sorge für die Seele 魂の世話) (ψυχῆς θεραπεία 魂の世話) を勧告する (advises, verlangt 要求する)。この考えは、彼の発言の初めに出てきて、末尾で繰り返される。⁽⁶²⁾しかし、魂が身体ないし外的財産よりもいっそう重要であるということを証明するものは何もない。そのことは当然明らかだと、実際問題として人びとはそんな風には振る舞わないのであるが、思われている。われわれにとっては、少なくとも理論的には、そのことに特異なことは何もない；実際にそれは、むしろ平凡なことのように見える。しかし、そのことは、あの時代のギリシア人にとって、キリスト教伝統の2000年の後継者であるわれわれと同じように明白であっただろうか。ソクラテースは、『プロタゴラス』における若者との論議において (in his discussion with the young man, im Hofgespräch 中庭での会話で) 同じ主張を力説している。そこでも彼は、自分の友の魂が危険な状態にあると言って切り出している。⁽⁶³⁾この文脈での魂の危険という主題はソクラテースの特色をよく示しており、いつも彼の、魂の世話をせよという勧告につながる。彼は医者のように語る——ただし彼の患者は、身体的な人間ではなく、精神的な存在である。⁽²⁾彼の弟子たちの著述のなかに、ソクラテースによって魂の世話 (the care of the soul, der Seelenpflege oder Seelsorge) が人間の最高の関心事 (interest, Anliegen) として語られている、非常にたくさん文章がある。ここにおいてわれわれは、彼の自分の責務と使命 (duty and mission, Aufgabe und Sendung) についての考え方のまさに核心を洞察することができる：彼は、それ (= 自分の責務と使命) は教育的であると、また (その : dieser) 教育の仕事は (彼には : ihm) 神の礼拝 (the service of God, Gottesdienst) であると、考えた。⁽⁶⁴⁾それは、それは ‘魂の世話 (caring for the soul, Seelsorge) ’ という責務であるから、一種の宗教的な責務として適切に述べられ得るだろう。⁽⁶⁵⁾というのは、ソクラテースの見解では、魂は人間において神性をもつもの (the divine, das Göttliche) である。ソクラテースは魂の世話を、価値と真理の知識 (the knowledge of values and truth, der Wert- und Wahrheitserkenntnis)、つまり *phronesis* (智慧) と *aletheia* (真理)、の世話であると、より厳密に定義する。⁽⁶⁶⁾魂は身体とも、外的な財産 (goods, Gütern) と同じほど鋭く区別される。⁽⁴⁾このこと (= 魂と身体との区別) は、(ただちに : unmittelbar) 一種のソクラテース的価値の階梯 (hierarchy of values, Wertordnung) というものを、さらにそれとともに、財産についての明瞭に段階づけられた新しい理論を、つまり、精神的な財産をもっとも上位に置き、身体的な財産をそれらの下に、そして、富や権力といった外的な財産を最下位に置く理論を、含意するのである。

この、ソクラテースによってあのように自信をもってはっきりと表明された価値尺度 (this scale of values, Wertskala 価値の序列) と、麗しい古い酒宴の歌によく示されている、⁽⁶⁷⁾ 通俗的なギリシア人のそれとの間には巨大な隔絶が存在する。

*Health is best for mortal men,
Next best is being fair to see,
Blameless wealth is next again,
Last, youth and friends and revelry.*

健康こそ死すべき人間にとっては最高の財産

二番目のものは容姿が美しいこと

疾しさのない富は三番目のもの

おしまいのものは、若さ (in Jugendglanz 若さの輝きのなかで) と友 (in der Freunde Kreis 友人仲間で) と飲めや歌えの大騒ぎ⁽⁵⁾

ソクラテースの思想は何か新しいものを——内的な世界を——追加したのであった。彼が話しているアレテーは、魂の卓越性 (the excellence of the soul, ein seelischer Wert 魂の価値) である。⁽⁶⁾

<注記と考察>

- (1) この箇所はドイツ版と英語版とでは文章構造が異なるが、趣旨は同じなので、タームの確認のために該当英語、ドイツ語を (品詞にこだわらずに) カッコ内に挿入しておいた。
- (2) イェーガーは、ソクラテースの思想がギリシア医術思想と本質的関係をもっていることを示唆する。
- (3) イェーガーは、ソクラテースの「魂の世話」とは「価値と真理の知識 (the knowledge of values and truth, der Wert-und Wahrheitserkenntnis)」、つまり「智慧 (phronesis) と真理 (aletheia)」の世話のことである、と確認する。
ところで現代社会において、教師をその社会的側面から「教育労働者」と規定する考え方があるが、ソクラテースの教育認識としては「聖職者」という規定になろう。この問題は歴史的な論議として深められていかなければならないが、ソクラテースは教育を、少なくとも「人材育成」とは考えていない。
- (4) イェーガーは、ソクラテースの「魂の世話」という思想では「魂」は「身体」とも明確に区別されている、と指摘している。
- (5) 英語版での *revelry*. に該当するドイツ語版でのタームは *zu blühen* となっているが、*zu blühen* のことか。
- (6) イェーガーは、ソクラテースが人間の財産として「魂の卓越性」を新たに見出し、それを「人間の財産」における最上位のものとし、次に「身体」、最下位に「外的な財産」と階梯づけて主張したことは、古代ギリシアが見せた画期的なことであると指摘している。

<原文注記>

36. プラトーン『パイドーン』96a-99d
37. プラトーン『弁明』19c.
38. プラトーン『弁明』26d.
39. クセノポーン『言行録』1.6.14. クセノポーンが古い賢人たちの著作ということで

意味していることは、4.2.8fの彼の言葉によって示されている：つまり医者たち、数学者たち、自然科学者たち、詩人たちによる著作である。後者の下りから、人は、ソクラテースがあらゆる机上の学問 (book-learning, Bücherstudium) を軽蔑していたと結論を下すかもしれないが、しかしそれは『言行録』1.6.14. によって否定される。ソクラテースは4.2.11. ではただ、その乱読家を (the omnivorous reader, über seiner enzyklopädisch vielseitigen Lektüre 彼の百科事典的に多方面にわたる読書にかまけて)、数ある技術のなかでもっとも重要なもの、他の残りの技術のすべてを包含し含意している (contains and implies, zusammenhält ばらばらにならないようにまとめている)、政治学の技術をなおざりにしていると非難しているだけである。⁽¹⁰⁾

40. プラトーン『パイドーン』97bf.
41. クセノポーン『言行録』1.4と4.3
42. クセノポーン『言行録』1.4.5f. この理論の源については、W.Teilerの、先行者の研究を分析している、洞察力に富む著作：*Geschichte der teleologischen Naturbetrachtung bis auf Aristoteles* (『アリストテレスまでの目的論的な自然考察の歴史』) (Zurich 1925)、を参照のこと。
43. プラトーン『パイドーン』98b.
44. ギリシア人の精神の発展におけるあらゆる新しい段階で、私はこの倫理的、社会的構造と宇宙秩序との等位関係 (co-ordination, Koordination) を強調してきたが、それはギリシア人の思考に非常に特徴的なことである：『パイデア』第I巻、5-7；49-51；54；152；160f.；182f.；266-267；323f. を参照のこと。
45. ヒッポクラテース『古来の医術について』12と20.
46. このことはクセノポーン『言行録』1.1.12；16、⁽¹¹⁾そしてアリストテレス ((原文) 注記21を参照のこと) によって強調されている。キケロー『国家論』1.10. 15-16. を参照のこと。⁽¹²⁾
47. キケロー『トゥスкулム談論集』5.4.10⁽¹³⁾
48. プラトーン『ソクラテースの弁明』18b, 23d⁽¹⁴⁾
49. プラトーン『ソクラテースの弁明』19c.⁽¹⁵⁾
50. (原文) 注記21を参照のこと。
51. クセノポーン『言行録』4.2.11,⁽¹⁶⁾ プラトーン『ゴルギアース』465a,⁽¹⁷⁾ さらに他の多くの諸節。
52. クセノポーン『言行録』1.2.4, そして4.7.9.
- 52a. ソクラテースの通常の日課について、クセノポーン『言行録』1.1.10もまた参照のこと。⁽¹⁸⁾
53. プラトーン『カルミデース』154d-e,⁽¹⁹⁾『ゴルギアース』523e.⁽²⁰⁾
54. 毎日運動に与えられる時間の長さについては、日々の食餌法を扱った医学文献を参照のこと (『パイデア』Ⅲ, 42f).⁽²¹⁾
55. E.N.Gardiner, *Greek Athletic Sports and Festivals* (London 1910) 469f.
56. 知的な集中心としての饗宴 (symposium) に関しては p.176f. を参照のこと。⁽²²⁾
57. プラトーン『弁明』29d.⁽²³⁾

58. 『弁明』が注意深く構成された芸術作品であると信じる人びとのうち、E.Wolfは特記に値する。彼の著書、*Platos Apologie (Neue Philologische Untersuchungen, ed. W.Jaeger, vol. VI Berlin 1929)*、はその作品の芸術的な形式の詳細な分析をしており、それがプラトーンによる、ソクラテースその人の、自由に描いた肖像であるということ、非常に説得的に論証している；プラトーンは彼の師に自分で語らせたのである。
59. エウリーピデース『ヘーラクレスの後裔たち (ヘーラクレイダイ)』 673f. :

οὐ παύσομαι τὰς κάριτας
Μούσαις συγκαταμειγνύς
ἀδίستان συζυγίαν.

プラトーン『弁明』 29d. を参照のこと : ἔωσπερ ἄν ἐμπνέω καὶ οἴός τε ᾧ, οὐ μὴ παύσωμαι φιλοσοφῶν.⁽²⁴⁾

60. 『プロータゴラス』 311bf. で、先ずソクラテースが若いヒポクラテースを試問する (cross-examines, ein elenktisches) 対話があり、その後、313af. で、勧告の言葉 (a protreptic address, das protreptische Gespräch 勧告の対話) が続く。⁽²⁵⁾
61. プラトーン『弁明』 29df.
62. プラトーン『弁明』 29d, そして 30b. を参照。⁽²⁶⁾
63. プラトーン『プロータゴラス』 313a.⁽²⁷⁾
64. この‘神の礼拝 (the service of God, des Gottesdienstes)’という概念は、ギリシア文学の早期に姿を現した；しかしそれに、ここで論議されているような意味を与えたのはプラトーンであった。『弁明』 30a において、ソクラテースは、ἡ ἐμὴ τῷ θεῷ ὑπηρεσία. のことを語っている。ὑπηρεσία (奉仕、奉仕的な仕事をする人々) ということばは θεραπεία (神への奉仕)⁽²⁸⁾ と同義であり、θεραπεύειν θεοῦς は *deos colere* である。それはいつも宗教的 (religious, kultischen 祭祀の) 意味をもっている；ソクラテースの教師としての活動 (activity, Tun 行為・振舞い) は、彼にとって、一種の礼拝 (worship, des Kultes) であった。
65. 原文注記 62. を参照のこと。‘魂の世話をする (care for the soul, Seelsorge 魂への配慮・魂の世話)’という言葉は、その考えはキリスト教の一部になってしまっているので、われわれの耳には特にキリスト教の響きがある。しかしそのキリスト教への取り込みは、キリスト教徒がソクラテースと同じ考えをもつ (have the same belief as Socrates, mit der sokratischen Anschauung...zusammentrifft ソクラテースの考えと出会う) という事実に起因する：つまり、パイデイアーは真の神の礼拝 (service of God, Gottesdienstes 礼拝) であるという、魂の世話 (care for the soul, der Seelsorge) が真のパイデイアーであるという、ソクラテースと同じ考えを。その考えの形成において、キリスト教は、プラトーンによるソクラテースの思想の紹介に直接的に影響を受けた (was directly influenced, direct bestimmt worden 直接的に決定的な影響を受けた)。
66. プラトーン『弁明』 29e.⁽²⁹⁾

67. スコリオン (宴席の歌)、作者不明。⁽³⁰⁾ また Bowra, *Greek Lyric Poetry*, 394. を参照のこと。

<注記と考察>

- (10)『言行録』の 1.6.14. はⅡ.B.2. の<注記と考察> (8) に引いた。4.2.8f は、本継続研究 (5) Ⅱ.5. <注記と考察> (8) で引いた。4.2.11. はその続きの部分で、下記のとおりである。

そこでソクラテースが言った、

「だが、まさか、エウテュデーモス、君は政治家とか経済家とか立派な支配人とかになって、他人ならびに自らの生活を幸福ならしめる、あの美德を求めているのではあるまい。」するとエウテュデーモスが言った、

「いかにもそれなんです、ソクラテース、その美德を求めているのです。」

「それはまことに」とソクラテースは言った、「最高にして最大の技術に進もうとしているものだ。なんとすれば、この技術は実に君主の道であり、帝王道と呼ばれているからだ。だが一体正しい人間とならないでこうした道を行ない得る者となれるかどうか、君は考えたことがあるか。」

- (11)『言行録』 1.1.12 を少し手前から引くと次のようである (佐々木訳、岩波文庫)。

「…彼は「万有の性質」についても、他の多くの人々のようにこれを論議することを欲せず、学者輩のいわゆる「宇宙」の性質を問うたり、個々の天界現象を支配する必然をたずねたりすることなく、かえってこうした問題を詮索する人間の言語道断を指摘した。第一に彼は、この連中が人間学 (τὰνθρώπινα, human affairs 人事) はもはや完全に知りつくしたと考えてかような問題の詮索に移るのであるか、それとも人間のことはそのままにして神界の事に憂身をやつし、人の本分を尽したと思っているのであるかを問うた。…」(挿入したギリシア語、英語はローブクラシカルライブラリーに拠る。)

また 1.1.16 は次のようである。

「ところで、彼自身はいつも人間のことを問題とし、敬神とは何か、不敬とは何か、美とは何か、醜とは何か、正とは何か、不正とは何か、思慮とは何か、狂とは何か、勇とは何か、怯懦とは何か、国家とは何か、為政者とは何か、政府とは何か、統治者とは何か、その他こうした題目を論じ、そしてこれらを知る者は君子人であり、知らぬ者はまさに奴隷者と呼ばれても致し方ないものと考えた。」

- (12) キケロー『国家論』 1.10.15 は、トゥベロの問いかけに対しスキーパー (キケロー) が応答する部分で、下記のとおりである。

「わたしたちの友人パナイティオスがここにおればじつによいのだが。彼はほかの事物と同様、とくにこれらの天界にかんすることをきわめて熱心にたえず探究しているのだ。だがわたしは、トゥベロよ、わたしの思うことをきみに正直に言うなら、そのような種類のすべてについて、あのわたしたちの友人にまったく同意しているわけではない。彼は、わたしたちが推測を凝らしてもどんな性質かほとんど想像ができないものを、さも確信あり気に述べる。だから彼はそのようなものを目で認め、実際に手で触れているとおもわれるほどだ。わたしはソクラテースのほうが彼より賢明であるといつも考えている。ソクラテースはそのよ

うな関心をいっさい捨て去り、自然について探究されるような事柄は、人間の理性が捉えることができるよりも大きなものであるか、あるいは人間の生活にまったく関係がない、と言った。」(『国家について』、『キケロー選集 8』岩波書店、1999年、所収)

- (13) キケロー『トゥスクルム談論集』5.4.10は、下記のとおりである。

「だが、ピュータゴラスは、単に哲学という名前の発案者であるばかりでなく、哲学の内容を拡大した人でもあった。プリーウスの討論ののち、彼はイタリアに到着し、いわゆるマグナ・グラエキアの地域を私的にも公的にも卓抜な制度と技術で整備したのである。彼の教説については、おそらく別に述べる時があるだろうが、昔の哲学からソクラテース——アナクサゴラスの弟子であるアルケラーオスに習った——に至るまで、数と運動が、また、万物がどこから発し、どこへ戻るのが取り扱われ、星の大きさ、星と星の間の距離、軌道、すべての天体現象が熱心に研究された。一方、ソクラテースは、哲学を初めて天上から呼び降ろし、町に据えつけ、さらには家の中にまで入れ、哲学に、人生、倫理、善なるものと悪なるものについて尋ねるよう仕向けたのだ。」(『トゥスクルム荘対談集』、『キケロー選集 12』岩波書店、2002年、所収)

- (14) 『ソクラテースの弁明』18bは、ソクラテースが、直接の告訴人ではなく、いつわりの最初の告訴人、つまりソクラテースに関する「噂をまき散らした」連中に対する弁明の部分で、下記のとおりである(『プラトン全集 1』岩波書店、1975年、所収、に拠る)。なお23dも同様の内容の発言である。

「…それはつまり、かれらが、諸君の大多数を、子供のうちから、手中にまるめこんで、ソクラテースというやつがいるけれども、これは空中のことを思案したり、地下のいっさいをしらべあげたり、弱い議論を強弁したりする、一種妙な知恵(智慧)をもっているやつなのだという、何ひとつ本当のこともない話を、しきりにして聞かせて、わたしのことを讒訴していたからなのです。」

なおこの原文注記は、ドイツ語版では、プラトーン『ソクラテースの弁明』19c；クセノポン『言行録』I 1,11. が指示されている。いずれも、ほぼ同様の内容の部分である。

- (15) 『言行録』19c. は、上記(14)に注記したドイツ語版での指示の個所であり、したがってドイツ語版では再び同個所が指示されている。

- (16) クセノポン『言行録』4.2.11は、ソクラテースとエウテュデーモスとの対話の場面で、本継続研究(5)のⅡ. 6. <注記と考察> (7)に継続する部分であり、下記のとおりである(佐々木訳)。

そこでソクラテースが言った、

「だが、まさか、エウテュデーモス、君は政治家とか経済家とか立派な支配人とかになって、他人ならびに自らの生活を幸福ならしめる、あの美德を求めているのではあるまい。」

するとエウテュデーモスが言った、

「いかにもそれなんです、ソクラテース、その美德を求めているのです。」

「それはまことに」とソクラテースは言った、「最高にして最大の技術(τέχνης,

arts)に進もうとしているものだ。なんとなれば、この技術は実に君主の道であり、帝王道と呼ばれているからだ。だが一体正しい人間とならないでこうした道を行ない得る者となれるかどうか、君は考えたことがあるか。」(挿入したギリシア語、英語はローブクラシカルライブラリーに拠る。

- (17) プラトーン『ゴルギアース』465aは、本継続研究(6)の《原文注記》の〈注記と考察〉(13)で引いてある。確認のために、該当箇所の中の一部だけ下に引いておく(加来訳『ゴルギアース』、岩波文庫)。

「…また、そういう料理法のようなものは、技術であるとは認めずに、むしろ経験であると主張しているのだ。なぜなら、それは、自分の提供するものが本来どんな性質のものであるかについて、何ら理論的な知識を持たず、したがって、それぞれのものを提供するにあたって、その理由を述べるができないからである。しかしぼくとしては、およそ理論を無視したものなら、そのようなものを技術(τέχνην, an art)とは呼ばないよ。だがもし、それらの点について君に異論があるなら、質問を待って説明することにしたいと思う。」(挿入したギリシア語、英語はローブクラシカルライブラリーに拠る。)

なお、ドイツ語版では「464b以下」と指示されている。これは上記465aへと連続する部分で、やはり上記の本継続研究(6)の同箇所から引いてあるが、確認のため、指示の箇所の最初の部分を下に引いておく。

ソクラテス つまり、わたしが言いたいのは、身体(σώματι, body)や魂(ψυχή, soul)が、実はちっとも良い状態にはないのに、良い状態にあると思わせるようにするものが、身体の場合にも、また魂の場合にも、あるということです。

ゴルギアース それは、あるね。

ソクラテス さあ、それでは、できることなら、もっとはっきりと、わたしの言おうとしていることを、あなたにわかってもらうようにしましょう。——対象はいま言われた二つなのだから、それに応じて二つの技術(τέχνας, arts)があるわけです。すなわち、魂のための技術は、これを政治術(πολιτικὴν, politics)と呼んでいるのですが、他方、身体のための技術には、そうすぐとは一つの名称をあたえることはできません。けれども、身体の手世をするという点では、それは一つのものであって、そのなかには二つの部門があると言っているのです。つまり、その一つは体育術(γυμναστικήν, gymnastic)であり、もう一つは医術(ιατρικήν, medicine)です。これに対して、政治術のなかで、体育術に相当するものは立法術であり、また医術に相当するものは司法です。…(挿入したギリシア語、英語はローブクラシカルライブラリーに拠る。)

この引用に際しての確認ということであるが、πόλις(ポリス)には1. 都市、2. 都市国家、国家、3. 市民(国民)としての権利、という意味が、πολιτικός(ポリティコス)には1. 市民にふさわしい、2. 共同体の形で生活する、社会的な、3. 国の、政治の、公共の、4. 自由な国家にふさわしい、5. 政治家の、といった意味が、またπολίτης(ポリテース)には1. 市民、国民、2. 同市民、同国人、といった意味がある。(古川編著『ギリシャ語辞典』大学書林)

- (18) 指示されているクセノポーン『言行録』の1.1.10は、クセノポーンがソークラテ

スのことを語っている箇所、下記のとおりである(佐々木訳)。

「それにまた彼は、絶えず家の外で暮した。早朝から遊歩路(ペリパトス)や道場(ギュムナシオン)へ出かけて行き、市場の出盛の午前中は市場にあり、それからあとは一日中、いつも大勢の人間が寄り集るところへ来ていた。そして大抵は談論しており、誰でも彼の話を聞いたのである。…」

- (19) 指示されているプラトーン『カルミデース』の154d-eは、カイレポンとクリティアースがソクラテースに美青年のカルミデースを紹介する場面で、下記のとおりである(『プラトン全集 7』岩波書店、1975年)。

するとカイレポンがぼくに話しかけて、

「この若者をどう思いますか、ソクラテース。いい顔だちをしているでしょう?」
と言った。

「並はずれているね」とぼくは答えた。

「しかしこの児が」とかれは言った。「その気になって着物をぬげば、あなたにはもう顔だちなど問題ではなくなるはずです。まあそれほどに、非のうちどころのない美しい姿かたちをしていますよ」

じつのところ、ほかの連中も異口同音にカイレポンの意見に賛成した。そこでぼくは「おやおや!これは驚いた」と言った。「きみたちの言うとおりだと、なんとこのひとは無敵ではないか!ただし、一つだけ、ほんのちょっとしたことがこのひとにつけ加わっていさえすれば、だが」

「何が、です?」とクリティアースがたずねた。

「それは、たましい(精神)について」とぼくは答えた。「もともと生まれつき素質が善い者であれば、ということだ。ところで、どうやら、クリティアース、かれはそういう人間であることがふさわしいはずだね。いやしくも、きみたち一門に属しているからには」

「ええ、ええ、それはもうその点からみても、しごく美しく資質のすぐれた人物(善美の人)です」とかれは言った。

「ではどうして、われわれは」とぼくは言った。「まさしくその点でかれをはだかにして、この目で見ないのだ?姿かたちのほうはあとにまわして。もうこのくらの年ごろだったら、どんなことがあっても、対話に応じてくれるはずだからね」

- 「ええ、そうですとも」とクリティアースは答えた。「ちょうどまた、かれは哲学的な知能もあるし、それに、自他ともに許すたいへんな詩人でもあるのですから」
- (20) 指示されている『ゴルギアース』の523eは、ソクラテースがゼウスのことばとして物語っている下りで、下記のとおりである。なおこの指示は英訳版で追加されたものである。

「…それから、その次には、彼ら人間たちは、いま言われたような衣裳をすべて脱ぎすて、裸になって裁かれるようにしなければならない。つまり、死んでから裁かれるようにすべきなのだ。それにまた、裁く者のほうも、裸にならなければならない。つまり、死んでいなければならないのだ。そして、ひとりひとりの人間が死んだなら、すぐそのときに、すべての身内縁者からは離れ、あの飾りと

なるものは全部地上に残してきたところの、その魂だけを、魂だけでもって観察するようにしなければならないのだ。その裁判が正しいものとなるためにはね。…」

(21) 指示されている『パイデア』Ⅲ, 42f は、本継続研究(9)のⅡ. 14. の後半部に該当する。

(22) 指示されている「饗宴」の叙述の箇所は、『パイデア』Ⅱ. の8(章) The Symposium : Eros のことである。

(23) 指示されている『弁明』29d. は、下記のとおりである(岩波書店『プラトン全集 1』)。

「わたしは、アテナイ人諸君よ、君たちに対して、切実な愛情をいだいている。しかし、わたしが命に従うのは、むしろ神に対してであって諸君にはないだろう。すなわちわたしの息のつづくかぎり、わたしにそれができるかぎり、決して知を愛し求めること(哲学)(φιλοσοφῶν, philosophy)を止めないだろう。わたしは諸君に勧告し、いつ誰に会っても、諸君に指摘することをやめないだろう。…」

(挿入したギリシア語、英語はローブクラシカルライブラリーに拠る。)

(24) エウリーピデース『ヘーラクレスの後裔たち(ヘーラクレイダイ)』は、前430年～前428年頃の作品とされるが、そのイェーガーが原文注記で指示する673f. の、3行のギリシア語引用部とその後は次のように訳されている(「ヘーラクレス」『ギリシア悲劇全集 6』岩波書店、1991年、に拠る)。なお3行のギリシア語に対応する英訳(ローブクラシカルライブラリー)も挿入しておく。

カリスらをムーサたちと(カリス:優美の女神…訳者注)

結び合わせ、楽しくも

一組になして分かつまい。

I shall not cease mingling
The Graces and the Muses,
a union most sweet.

楽の音と共に暮らし、

花冠を常に頭に戴こう。

老いたる歌い手はなお

ムネーモシュネーの響きを歌う。

われもまた、葡萄酒めぐむディオニューソスの

かたわらで、また七絃の

豎琴の歌の調べ、

リュビアーの笛の音に合わせ、

ヘーラクレスの勲功をたえず歌おう。

わが舞いを導きたまうムーサらの

はたらきをわれは絶やすまい。

また『弁明』の箇所は、上記(23)の「わたしの息のつづくかぎり、わたしにそれができるかぎり、決して知を愛し求めること(哲学)(φιλοσοφῶν, philosophy)を止めないだろう。」の部分である。

(25) 指示されている『プロータゴラス』311bf. は、ソークラテースの(アポドロス

の息子でパソンの弟だという、コス島の医師ヒッポクラテースと同名の) ヒッポクラテースとの会話についての発言が続いていく部分である。その始まりの一部分だけを抜粋しておく(藤沢訳、岩波文庫、挿入したギリシア語、英語はローブクラシカルライブラリーに拠る)。

(ソクラテース) …

それからぼくたちは、立ちあがって中庭に行き、そこをぶらぶらと歩きまわった。ぼくはヒッポクラテースの気持ちの強さをためしてやろう (ἀποπειρώμενος, to test) と思って、質問をして彼をよくしらべてみる (διασκοπουν, examining) ことにした。

…

313af. は、上記の続きであり、ソークラテースと、アテーナイにやってきているソフィストのプロタゴラスに学ぼうとする青年ヒッポクラテースとの会話が展開していく場面である。その出だしから314にかけての部分を下に引いておく。(なお311bfと313afとの中間部を、本継続研究(5)Ⅱ. 6. の〈注記と考察〉(6)で引いている。)

そこでつぎに、ぼくはこう言ってやった。

「いったいどうなのだね。君には、自分がいま、魂をどのような危険にさらそうとしているかがわかっているのかね? かりにもしこれが、君が身体を誰かにゆだねて、身体がよくなるか悪くなるかの危険をおかさなければならないというような場合だったとしたら、君はきっと、その人にゆだねるべきか否かを、いろいろと思案を重ねたことだろうし、また、何日も何日も考えながら、友人や身内の者の助言を求めたことだろう。しかるに、君が身体よりも大切にしているこの魂というもの、君のすべての幸不幸はそこにかかり、それが善くなるか悪くなるかによって左右されるところのもの、そういうものについては、君は父親にも、兄弟にも、またわれわれ仲間の誰ひとりにも、ほかならぬこの君の魂をあの新来のよそ者にゆだねるべきか否かを、相談しなかったのかね。君の話によると、昨夜このことを耳にするや、夜明けを待たずにとんできて、君自身をあの男にゆだねるべきかどうかということについては、一言も語らず、相談もせず、そして自分の金ばかりか、友だちの金まで注ぎこんでもかまわぬつもりになっているのか——まるで何が何でもプロタゴラスにつかなければならないと、もうすっかり決めこんでしまったかのように! そのプロタゴラスという人を、君は知りもしなければ、まだ一度も話をかわしたこともないと言う。ただソフィストと名づけるだけで、ソフィストとはそもそも何ものであるかについては、明らかに君は知らずにいながら、何もわかっていないその人に、君自身をゆだねようとするのか」

ぼくの言葉を聞いて彼は言った、

「あなたのおっしゃることから反省してみると、ソクラテース、どうもそういうことになるようです」

「そもそもソフィストとは、ヒッポクラテース、魂の糧食となるものを、商品として卸売りしたり、小売りしたりする者ではないだろうか。このぼくには、どうも何かそのような者にみえるのだが」

「魂の糧食となるもの (ψυχή τρέφεται, on which a soul nourished) とは、ソクラテス、何ですか」

「もろもろの学識 (Μαθήμασι, doctrines) だ。そして、友だちとして言うのが、ソフィストが、ちょうど身体の糧食をあきなう卸商人や小売商人と同じように、自分の売りものをほめたてて、われわれをだますことのないように、気をつけたほうがいいよ。というのは、彼ら食物の商人たちも、自分たちが持ってくる商品について、そのどれが身体によいか悪いかを自分自身でも知らないのに、売るにあたって何もかもほめたてるし、彼らから買うほうは買うほうでまた、体育家 (γυμναστικός, a trainer) や医者 (ιατρός, a doctor) でもないかぎり、その良し悪しがわからない。それと同じように、いろいろの知識 (μαθήματα, doctrines) を国から国へと持ち歩いて売りものにしながら、そのときそのときに求めに応じて小売りする人々、そういう人々もまた、売りものとなれば何もかもほめたてるけれども、しかし中にはおそらく、君、自分で売ろうとするものについて、そのどれが魂に有益であり、有害であるかを、知りもしないような連中がいるかもしれない。彼らから買うほうの人々も、やはり同様だ——この場合は、魂をあつかう医術の専門家とでもいうべき者でないかぎりね。

だから、君がもしそういった彼らの売りもののうちで、どれが有益でどれが有害かをちゃんと知っているのだったら、いろいろな学識を買い入れるということは、それがプロタゴラスからであろうと、ほかの誰からであろうと、君にとって別に危険はないわけだ。だが、もしそうでないのなら、君、何よりも大切なものを危険な賭にさらすことのないように、よくよく気をつけたほうがいいよ。じっさいまた、学識を買う場合には、食物を買う場合よりも、はるかに危険が大きいことでもあるからね。なぜって、これが飲食物だったら、卸商人や小売商人からそれを買っても、別の容れものに入れて持ちかえることができるし、飲んだり食べたりして身体に入れる前に、家にとっておいて、食べたり飲んだりしてよいものといけないもの、またその量や時期などについて、識者を呼んできて相談することができる。だから、それを買うのにたいした危険はないわけだ。だが、これが学識となると、別の容れものに入れて持ちさるわけにはいかない。いったん値を支払うと、その学識を直接魂そのものの中に取り入れて学んだうえで、帰るまでにはすでに、害されるなり益されるなりされてしまっていなければならないのだ。だから、われわれは、こういった事柄を考察するには、われわれより年長の人たちの助けもかりることにしよう。われわれは、これだけのことを決めるにしては、まだ若年の身だからね。

…」

なお、原文注記に挿入したドイツ語は、ギリシア語の ἐλέγχω (エレンコー：吟味する、取り調べる、試す、問い質す)、προ-τρέπω (プロトレポー：奨励する、説得する、勧める) の訳である。

- (26) イェーガーが指摘している『弁明』29d は、ソクラテースが、自分はいつもみんなに次のように語るであろうと述べている箇所、直接的には下記のとおりである(29d-29e, 久保訳、岩波文庫)。

『好き友よ、アテナイ人でありながら、最も偉大にしてかつその智慧と偉力との故にその名最も高き市の民でありながら、出来得る限り多量の蓄財や、また名聞や榮譽のこののみを念じて、かえって、智見 (φρονήσεως, wisdom) や真理 (ἀληθείας, truth) やまた自分の靈魂を出来得るかぎり善くすることなどについては、少しも気にもかけず、心を用いもせぬことを、君は恥辱とは思わないのか』また『弁明』30b は下記のとおりである (久保訳、岩波文庫)。

「けだし私が歩き廻りながら鞅掌するところは、若きも老いたるも、諸君のすべてに向かって、身体と財宝とに対する顧慮を、靈魂の最高可能の完成に対するそれよりも先にし、またいっそう熱心に、することがないように勧告すること、また、徳が富から生ずるのではなくて、むしろ富および人間にとっての他の一切の善きものは、私的生活においても公的生活においても、徳から生ずる旨を附言することに外ならないからである。」

(27) イェーガーが指摘している『プロタゴラス』313a では、プロタゴラスがアテナイにやってくることを興奮気味に語る青年ヒポクラテースに、ソクラテースは次のように語りかけている (藤沢訳、岩波文庫)。

「いったいどうなのだね。君には、自分がいま、魂をどのような危険にさらそうとしているのかわかっているのかね？ かりにもしこれが、君が身体を誰かにゆだねて、身体がよくなるか悪くなるかの危険をおかさなければならないというような場合だったとしたら、君はきっと、その人にゆだねるべきか否かを、いろいろと思案を重ねたことだろうし、また、何日も何日も考えながら、友人や身内の者の助言を求めたことだろう。しかるに、君が身体よりも大切にしているこの魂というもの、君のすべての幸不幸はそこにかかり、それが善くなるか悪くなるかによって左右されるところのもの、そういうものについては、君は父親にも、兄弟にも、またわれわれ仲間の誰ひとりにも、ほかならぬこの君の魂をあの新米のよそ者にゆだねるべきか否かを、相談しなかったのかね。…」

(28) θεραπεία (テラペイアー): 「奉仕、世話」「神への奉仕」「養育」「看病」「動植物の世話」

(29) プラトーン『弁明』29e. は上記(26)の「智見」「真理」を参照のこと。

(30) スコリオン (宴席の歌): 松原著によれば、「ギリシアの饗宴 (シュンポシオン) で歌われた短い抒情詩。スパルターで活躍した音楽家テルパンドロスの創始と伝え(られ)るが、前6,5世紀には主にアテナイで盛んに作られ、以来長い間アッティケー地方を中心に流行した。」という。また「スコリオンは銀梅花 (ミュルトゥス) の枝を手にした男が最初に或る題について歌うと、次にその枝を回された男がうまく関連させながら次の歌を吟ずるという趣向の、連歌に似た形式のものであった。古くアルカイオスやアナクレオンが名作をものしたとはいうものの、今日ではパッキュリデースの断片など幾篇かが伝わるに過ぎない。」ということである。

Ⅲ. 現代日本の教育研究における古代ギリシア思想の理解：考察ノート④

～継続研究(10)における～

[Ⅲ. の趣旨について：イエーガーは『パイデア』第1巻の「序文」で、「今日でも、ギリシア的教養の徹底的な、根源的な理解抜きにはいかなる教育の意図や知識をもつことも不可能である。」という確信がこの著を生んだと語り、「この本は学者にだけではなく、千年間の文明を維持しようとする我々の時代の奮闘のなかにあって、ギリシアに近づく術を再発見しようと努めるすべての人びとのためにも向けられている。」と述べている(本継続研究(3)、Ⅱ. 第1章<訳文④>)。イエーガーはこのように、現代という時代の課題の洞察を含んで古代研究に向かい、大著を完成させている。本継続研究は、このようにして成し遂げられた研究の瑞々しさに触発されてのものであり、『パイデア』を読みながら考察意欲を引出されている諸点についても、この拙論そのものとして展開することはできないけれども、『パイデア』研究の一環として記してみようと思う。]

ここでは、デンマークの思想家であるハル・コック (Hal Koch, 1904~1963) に注目する。現代日本では、グルントウィと彼が唱導した「フォルケホイスコーレ Folke-højskole」(「国民大学」「国民高等学校」などと訳されている) については広く論究されてきているが、⁽¹⁾ その思想と実践を継承する位置にあるハル・コックについては教育研究としてはほとんど言及されることはなかった。そのような研究状況にあって、小池直人がコックの1945年の著書『生活形式の民主主義—デンマーク社会の哲学—』(原著名『民主主義とは何か』)を訳出した(花伝社、2004年)ことは大きな意義がある。その後ようやく、社会教育研究においても、ハル・コックを対象とするものが現われてきている。⁽²⁾

小池は、上記訳書の「訳者まえがき」で、「…ハル・コック(1904～1963年)はデンマークの著名な教会史の研究者であり、社会教育家である。本書は彼の主著のひとつで、近代デンマークに発達した民主主義の基本思想を一般向けに説いた啓蒙書である。といっても、この「啓蒙」の意味は深長であって、本書が戦後の民主主義論争の出発点になり、現在でも戦後のデンマーク社会、国家形成にとっての古典的書物として多方面から論究され、民主主義の「国民的な基準」「1945年当時と同様にアクチュアルである」と指摘される。まさに、現在のデンマーク社会の哲学というにふさわしいものである。」と説明している。

小池はさらにコックの『グルントヴィー——デンマーク・ナショナリズムとその止揚——』を訳し(風媒社、2007年)、また『福祉国家デンマークのまちづくり——共同市民の生活空間』(かもがわ出版社、2007年12月、共著)、『デンマーク 共同社会の歴史と思想——新たな福祉国家の生成——』(大月書店、2017年9月)を著わすなど、旺盛にデンマークの社会と思想の研究を進めている。その上記『デンマーク 共同社会の歴史と思想』で小池はコックの1945年の著作について、「とくに戦中の活動の経験は、コックの名を不朽のものにした著書『民主主義とは何か』(邦訳『生活形式の民主主義』)に結実する(Koch1945)。この書物は一方でデンマーク史上に発達した政治文化の意義、とくに19世紀以来の民衆啓蒙の伝統を評価し継承しながら、しかもそれをヨーロッパ

的なギリシア・キリスト教的ヒューマニズムの地平のなかにすえ直し、現代デンマークの公共性を具現する「共同市民性」への道標を示したのである。」と説明している。

そのコックの『民主主義とは何か』(邦訳『生活形式の民主主義』)の思想とイエーガーの、「現代」を洞察しようとするパイデア研究とは類似する本質をもつ。そのことを考える手がかりとして、コック著の「第3章 憲法——種々の憲法——」の中の「人間」の一部を、前後の脈絡は略して、下記に引いておく。

「…このように、生活、人生の現実についてのイエスのことばは簡単明瞭であり、そして彼の諸々のことばはいちじるしい権威をともなっている。一度それらのことばを聞いた者は、そこから逃れることは困難であった。その権威はキリスト教を超えてより広範囲におよぶ。すなわち、そのようにして生活と生活法は異教徒やユダヤ人のためのものでもあり、すべての地上の子どもらのためのものでもある。生活の諸条件はキリスト教徒であろうがなかろうが変えられない。これが私たち西ヨーロッパ文化全体の基礎であったギリシア・キリスト教的ヒューマニズムである。それは今日もなお私たちの西ヨーロッパ民主主義の基礎である。このヒューマニズムなくして、すべての民主主義を決定づける概念は内実を失う。自由と正義ということがらに実質的特徴を与えるのは、まずなにより生活と民主主義にかんするこうした理解である。私たちはすでにそのことを見てきた。自由は人間のために語ることができるだけであり、動物あるいは植物のためには語れない。正義は人間相互の結合のなかに、そしてその結合によってはじめて存在するにいたる。こうしたことばが何を意味し、なぜそれが無償の贈り物であり、かくもデンマーク王国の武器であるのか、このヒューマニズムによってはじめて理解できる。そのことばはたんに人間相互の結合を創出するものである。それは一方の側にありながら、他方の側のために生きているものを表現する。」(訳書 107p)

さてイエーガーは、1961年の著作 *Early Christianity AND Greek Paideia* (『初期キリスト教とパイデア』野町啓訳、筑摩書房、1964年)の原注で、コックの最初期の著作 *Pronoia und Paideusis : Studien über Origenes und sein Verhältnis zum Platonismus* (『プロノイアとパイデウシス——オーリゲネースとそのプラトーン哲学との関係に関する研究』、1932年)に直接言及している。その原注(第v節の注39.)を【資料 - 6】として引いておく。⁽³⁾⁽⁴⁾ なおイエーガーは、『初期キリスト教とパイデア』の主旨を、著作『パイデア』の構成の一部と考え続けており、イエーガーの『パイデア』理解に不可欠であるので、その著の「序」を【資料 - 7】として引いておく。また、そのような両書の間関係を短文のなかに説明しているものとして、『初期キリスト教とパイデア』の原注(第VI節の注1.)を【資料 - 8】として引いておく。

上述のようなコックとイエーガーとの本質的な関連を見るとき、さまざまな検討事項が着想されるのであるが、先ずは次の二つの課題に目を向けておきたい。

第一は、ギリシア的教養・教育の思想を、教会の改革史、ルネサンス、近現代思想の形成、の根底を貫くものとして理解していくという課題である。⁽⁵⁾

第二は、戦後日本の憲法・教育基本法における「個人(の尊厳)」の思想(=ヒューマニズムの思想)を、デンマークを含む、世界の改革思想と関連させて理解していくという課題である。⁽⁶⁾

【資料 - 6】

W. イェーガー『初期キリスト教とパイディア』（野町啓訳、筑摩書房、1964年；原著1961年）：第v節の注39。（野町訳、p.163）

「神による教育（パイデウシス）の理念は、オリゲネスの全神学において、根本的な重要性を持っている。H・コッホ「プロノイアとパイデウシス」（1932年）参照。私のオリゲネス像から明らかなように、コッホのこの著書は、われわれのオリゲネスの理解を前進させるにあたり、決定的意義を持つものと考えられる。オリゲネスのキリスト教神学に対する、ギリシア哲学の深甚な影響を指摘したのは、むしろ、このデンマーク人の学者がはじめてではない。彼の先駆者はいるのである。ギリシア哲学の影響は、すでに、教義の多くの点について、証明されていた。特に、E・ド・フェイのオリゲネスに関する偉大な業績は、代表的なものである。しかし、オリゲネスの「パイデウシス」の理念に力点をおき、それが、彼の歴史哲学の中で、どのような意義を持っているかを論じたのは、コッホが最初である。オリゲネスの場合、神的摂理の概念は、パイデウシスの理念により意味が与えられている。ハル・コッホは、神の人類の救済計画に関するオリゲネスの教義において、この理念が、決定的な役割を持つ点を指摘したのである。コッホは、この理念が、オリゲネスの全思想構造の中で、主導的地位を占めていることを、彼の全著作から論証している。コッホの以上の成果は、オリゲネスの聖書解釈にみられる、内的統一をとく鍵となっているのである。この点を認めた学者が、なぜ彼以前に現われなかったのであろうか？その理由は、一般に、ギリシア精神の歴史的伝統の中で、パイディアの理念が、中心的位置を占めていたことに対する、理解の不足に求められる。このような背景に対する理解の不足は、コッホ自身の、オリゲネスの神学哲学思想の分析にすら、みられるのである。しかし、コッホが、オリゲネスの著作の、広汎かつ綿密な読書からのみ、以上のような結論に達したことは、賞讃されてよい。彼の結論は、私がたどった、原初からの、後にギリシア文化の中心理念となるまでの、ギリシアのパイディアの全歴史と、一致する。オリゲネスにみられる、神を全人類の教師とする教義は、ギリシアのパイディアの伝統が、いかに強い力を持っていたかを示す、顕著な例証である。オリゲネスのこのような教義により、パイディアの伝統は、歴史の新たな段階に入ることになるのである。」

【資料 - 7】

W. イェーガー『初期キリスト教とパイディア』（野町啓訳、筑摩書房、1964年；原著1961年）の「序」

この本は、私が、ハーバード大学において、行なう光栄を与えられた、1960年度カール・ニューエル・ジャクソン記念講義を骨子とするものである。この講義のゆかりとなっているカール・ジャクソン教授には、私は、ハーバードに就任するについて、いろいろとご配慮をたまわった。いま私は、この大学の教職から、退任しようとしている。そのような時にあたって、ジャクソン教授にたいし、このような形で、私の変らざる感謝をとどめえたことは、意味深いことである。

この講義の主題については、私は、さまざまな角度から、より簡単にではあるが、他のいろいろな機会に論議してきている。この本では、問題を大幅に発展させ、豊富な註をつけ加えた。註は、本書の、本質的な一部をなしているのである。しかしながら、私が、かねてから持っている計画は、この広範囲にわたった講義においても、十分に尽されたとはいえない。私は、「パイディア」を著わすにあたって、始めから、ギリシア的教養（パイディア）の、初期キリスト教世界における受容について、特に一卷をあてるべきであると意図していた。そのとき以来、私の著作の大半は、古代キリスト教文学の分野でなされてきた。しかし、そうとはいえ、そのような研究の範囲が、全く広範囲にわたるために、ギリシア的教養（パイディア）の伝統の、古代末期、キリスト教確立期の数世紀間における歴史的連続性と、その変容について、いっそう包括的な著作を完成しようという私の計画は、達成をはばまれたまま、今日にいたっている。現在の私の年齢では、この問題を、将来、大きなスケールで取扱う確信はほとんどない。たとえ、目標達成の希望をあきらめないにしても、また、事実、そうするだけの気がまえば、充分あると思っているが、ともかく、問題のいくつかの主要なアウトラインについて、このような講義の形で書き下し、それを出版しようと、決心したわけである。私は、本書が、将来、より大きなものとしてまとめ、それに対する一種の仮払いのようなものとなることを、希望している。

このような際に、死海沿岸クムラン洞穴で発見された巻物とか、上エジプトのナグ・ハマディで見出された、グノーシス派の文書の全集成のような、オリエント起源の豊富な資料の宝庫が、われわれの手にもたらされたことは、全く幸運であった。またこれと相俟って、初期キリスト教の歴史的研究の復活が、にわかにもみられている。これらの動向と同時に、紀元後最初の数世紀間に、キリスト教の歴史を決定した、第三の主要な要因、すなわち、ギリシアの文化と哲学の、全体的な再評価が、はじめられなければならない。私は、この小著を、このような新しい視点からの研究に対する、最初の寄与として、提出するわけである。

1961年復活祭

ハーバード大学にて

ヴェルナー・イエーガー

【資料 - 8】

W. イェーガー『初期キリスト教とパイディア』（野町啓訳、筑摩書房、1964年；原著1961年）：第VI節の注1。（野町訳、p.163-165）

「ギリシア的パイディアは、ソフィスト以降、紀元前4世紀から、元来の陳腐な意味と実践から、全くはなれてくる。これと共に、パイディアに関する、最も重要な二つの概念と、形態が確立される。多くの異邦人たちが、ただ「ギリシア的パイディア」を得るという目的から、アテネに来るようになる。イソクラテスが、「ギリシア的パイディア」を、全人類に妥当する普遍的原理、と主張したのは、まさにこのときであった。私の「パイディア」Ⅲ・79頁参照。

プラトンも、同時に、彼の考える哲学と、人間の真のパイディアを同一視し、

在来のパイディアに対する見方を、精神の尊厳という最高の領域へと高揚したのである。「パイディア」Ⅱ所収の、プラトンの「饗宴」、「国家」、「法律」に対する私の解釈参照。オリゲネスの時代におけるプラトンの追隨者たちは、プラトンのパイディアの理念の中に、自己の信奉する宗教をみとったのである。オリゲネスも、同じレベルでプラトンのパイディアを理解している。すなわち彼は、キリスト教が、人間教育（パイディア）を達成するものであり、その最高の段階をなすものと考えた。彼は、さらに、パイディアを、「存在そのもの」の領域に投入し、世界創造当初における、神の意志を実現するものとしたのである。」

<注記と考察>

- (1) デンマーク「国民大学」とその日本への影響については、碓井正久の叙述の一部によって確認しておく。(碓井『社会教育の教育学——碓井正久教育論集Ⅰ』国土社、1994年、p.148)

自由大学運動の左傾化をうながした農村社会状態は、田沢・土田らとはまたちがった草の根の学習運動を簇生させた。加藤完治が主宰する日本国民高等学校をはじめとする、さまざまな、いわゆる塾風教育運動である。

日本国民高等学校は、その名の示すように、デンマルクの国民大学（または国民高等学校 Folkehøjskole）にならったものである。デンマルクの国民大学は、19世紀後半、牧師・詩人であり政治家ともなったグルントウィの提唱にこたえて各地に作られていった、ヴォランタリーな青少年教育施設であった。18世紀から19世紀にかけて、デンマルクは、たえず戦争と外国の占領支配による被害をうけて、国土は荒廃し、国民の志気もまた衰弱していた。グルントウィは、この荒廃からの脱出を、青少年教育に求めていった。各地の中堅農民の子弟を農閑期に集め、彼がそこにデンマルク精神が宿っていると考える民族神話を軸にした歴史と、デンマルク語とを中心に、さらに農業の合理的経営に資する教科を加えた、合宿訓練の施設を構想したのであった。この施設で国民的連帯観と合理主義とを兼ねてつちかった青年たちが各地の指導者として活躍し、デンマルクは農業国家として安定した国際的地位を確保するようになったのである。

このデンマーク国民大学の成功は、近代工業発展の裏に進行する農村の衰微になやむ各国に、これにならった同様の施設を作る動きをうながした。日本へは、あの地方改良運動期に農本主義者たちの心に触れるところがあって、すでに紹介されていたのであるが、1920 - 30年代の農村恐慌期に、これがさらに注目されるようになったのである。土田杏村も、彼の自由大学運動をデンマルク国民大学に擬することがあった。

デンマルク国民大学設立の精神には、過去の学校教育の主知主義への批判が強く含まれていた。多かれ少なかれその影響をうけた我が国の塾風教育運動もまた、近代日本国民教育制度下の学校を生活より遊離した主知主義の教育として、強く非難した。その点では、近代教育の内容編成に資するところもあった。しかし、グルントウィの教育の核であった神話・歴史が、皇国主義史観に基づく偏狭な国史に換骨奪胎されて教育の中心にすえられ、主知主義批判をかさねていったとき、

塾風教育は、デンマークの施設とはちがって、合理主義的精神を急速に失っていく。だから、塾風教育施設は、やがて到来する日本ファシズムの土壌を耕すような位置を占めるようになってしまったのであった。

なお上述の確井のデンマルク国民大学に関する叙述はファシズム期までに限定されており、ファシズム期から戦後改革期のハル・コックの思想と運動には開かれていない。

- (2) 原田亜紀子「デンマークの若者の「民主主義の学校」での主体形成に関する考察——デンマーク若者連盟におけるハル・コックの思想に着目して——」(日本社会教育学会紀要『社会教育学研究 2017』第53巻第1号、2017年3月)。なおハル・コックに関しては、拙論「『人間性の開花』と表現・文化活動——ヒューマニティの意識化とその継承に学ぶ」(『月間社会教育』2009年2月号、所収)などで、小池訳書に学んで言及している。
- (3) イェーガーがコッホの見解に関して注記していることは、初期キリスト教史における教父オーリゲネース(後185年頃～254年頃)の思想の評価をめぐっているが、有賀鐵太郎著『オリゲネス研究』(『有賀鐵太郎著作集1』1981年、初版は昭和18年、再版は昭和21年)ではコッホの『プロノイアとパイデウシス』は研究の重要な一部となっている。『有賀鐵太郎著作集1』の「解題」(水垣渉)には、次のような説明箇所がある。

この時期 (= 昭和10年頃; 引用者)、外国におけるオリゲネス研究は新しい段階に入っていた。19世紀のレーデペニング、20世紀に入ってド・フェーの名が代表する、オリゲネスの生涯、著作、思想の全体にわたる総合的研究はひとまず幕を閉じ(今日までもそれらに匹敵する研究は現われていない。ノタンのそれは未だ思想に及んでいない)、フェルカー、コッホ、カジウらの新しい問題意識による研究が現われつつあった。フェルカーの『オリゲネスの完全性の理想』は昭和6年、コッホの『プロノイアとパイデウシス』は昭和7年、カジウの『序論』も同じく7年に出た。これらの研究に著者が大きな刺激を受けたことは、本書の各所に示されている。つまり、著者の問題意識に十分近いものをもち、したがってまたそれとの批判的折衝が可能な共通の研究状況が現出していたのである。これはきわめて幸いなことであった。著者自身のいくつかの研究方向はこれによって一挙にオリゲネス研究に焦点を結んだ。

- (4) オーリゲネース(オリゲネス): 後185年頃～254年頃。「初期キリスト教会のギリシア教父」で、「アレクサンドレイア学派の代表的神学者」とされる。「エジプトに生まれ、アレクサンドレイアのクレメーネースの学校に学び、早くから俊秀ぶりを発揮。師が迫害時に逃走したのち、18歳の若さで教理学校の校長」になった(203)という。さらに受難を経験しながら、「パレスティナのカイサレイアに新しく学校を設立し、ギリシア哲学を援用しつつキリスト教神学の体系化に努め、またローマ、アラビア、ギリシアなど各地を旅して説教を行ない、帝母ユーリア・ママエアの招聘をも受けた。老齢に至ってデキウス帝の迫害(250～251)に遭い、投獄され何日間も拷問を加えられたが耐え抜き、釈放後テュロスまたはカイサレイアで没した。」という。また、「たいへんな多作家で、その数6千に及ぶ著書を残し、アウグスティヌス

スと並ぶ古代最大の神学者として後代に甚大な影響を与えた。しかるに、彼の後のグノーシス主義的傾向と大胆な比喩的聖書解釈などの教説は、やがて煩瑣な神学論争(オーリゲネース論争)を惹き起こし、400年には「異端」の烙印を捺され、552年にはついに「破門」宣言を下されるに至った。そのせいで著書も大半が散逸し、現存するものは断片ないし一部のラテン語訳に過ぎない。」という。(松原著)

- (5) 「ギリシア的パイダイアーとキリスト教」および「南原繁の思想と憲法・教育基本法」に関する素描については、拙論「ヒューマニティの思想の現代性について—ギリシア的パイダイアー(教養)の再生を考える—」(教育科学研究会編集『教育』2008年2月号, 国土社、所収)を参照のこと。また新渡戸稲造の教養思想の素描に関しては、拙論「世界にかかわって生きることと内的なものへの憧憬と—社会教育・生涯学習の哲学を考える」(畑・草野滋之編『表現・文化活動の社会教育学—生活のなかで感性と知性を育む』(学文社、2007年、所収)の注(30)を参照のこと。
- (6) この課題は、「現代」の中に「過去」と「未来」とを洞察し、世界世論の根柢を考えようとするものである。ヴァイツゼッカー大統領のドイツの敗戦40周年を記念して行なった連邦議会での演説に関しては、拙論「想起に関する研究—社会教育(自己教育・相互教育)の原理をたずねて—」(『都留文科大学大学院紀要第7集』2003年3月、所収)の「七 Erinnerung (エアインエルング)をめぐって—ヴァイツゼッカー大統領演説の思想—」を参照のこと。

Received: December 05, 2017

Accepted: December 06, 2017